日本体育大学紀要（Bull. of Nippon Sport Sci. Univ.），46 (2)，189–218，2017

【特別寄稿】

日本体育大学における体罰排除教育の取り組み

―運動部活動の種類と所属状況の比較―

谷釜　了正[1)]，福場久美子[2)]，市川優一郎[3)]，小川　拓郎[4)]，鈴木　悠介[5)]，深見　将志[6)]，
本間　悠也[7)]，雨森　雅哉[8)]，宇部　弘子[2)]，軽部　幸浩[9)]，藤田　主一[2)]

[1)] スポーツ史研究室
[2)] 教育心理学研究室
[3)] 日本大学文理学部
[4)] 埼玉県体育協会
[5)] 東京都立板橋特別支援学校
[6)] 日本大学商学部
[7)] 開成中学校・高等学校
[8)] 心理学研究室
[9)] 駒澤大学文学部

Effect of corporal-punishment-elimination education at Nippon Sport Science University

―Comparison of students' choice of extracurricular club activities and affiliated events―

Ryosyo TANIGAMA, Kumiko FUKUBA, Yuichiro ICHIKAWA,Takuro OGAWA,
Yusuke SUZUKI, Masashi FUKAMI, Yuya HOMMA, Masaya AMEMORI ,
Hiroko UBE, Yukihiro KARUBE and Shuichi FUJITA

Abstract: The present study examined the effects of the educational method adopted by Nippon Sport Science University for elimination of corporal punishment. Specifically, a survey was conducted on "Corporal Punishment" for the freshmen who entered the university in April 2016 and the 2nd–4th graders. Students were grouped into two: 1st graders and 2nd–4th graders. An analytical examination was made on what type of "Corporal Punishment" they received during their athletic activities and whether they perceived the presence (or absence) of the "Effect of Corporal-Punishment-Elimination Education." Differences were observed between the two groups based on their choice of participation in club activities and affiliated events.

(Received: October 31, 2016)

Key words: experience of corporal punishment, extracurricular club activities and affiliated events, difference in years based on grades

キーワード：体罰経験，運動部活動の種類と所属状況，学年差

緒　　言

体罰に関する様々な事件の報道を契機に，体罰が社会問題として大きく扱われるようになって久しい。これまで，日本体育大学における体罰研究チームでは，体育を専攻する大学生を対象に，体罰の実態と意識や体罰排除教育の効果についての調査研究を積み重ねてきた。その一連の研究において，現代の大学生が経験してきた多くの体罰の実態が明示されると同時に，大学生が持つ体罰への意識についても徐々に解明されつつある。

それらの体育を専攻する大学生を対象とした調査研

究において，共通して得られた重要な知見のうちの一つに,「体罰が運動部活動の最中に行われることが最も多い」ということが挙げられる[1)2)3)4)]。これは，教員側を対象とした実態調査においても同様の結果が得られている[5)]。これらの研究の結果から，学校教育の現場で行われる体罰は部活動と密接な関係にあり，特に運動部活動の指導者からの体罰が多いことが示唆されている。そのため，体罰の実態を正確に把握し，その背景にある体罰への意識を理解するためには，運動部活動という観点から詳細に検討していく必要があると考えられる。そこで本研究は，運動部活動に関連する諸項目に着目し，体罰の実態と意識について検討することとした。

文部科学省：運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議[6)]によると，運動部活動とは「学校教育の一環として，スポーツに興味と関心をもつ同好の生徒の自主的，自発的な参加により，顧問の教員をはじめとした関係者の取組や指導の下に運動やスポーツを行うもの」とされている。運動部活動にて行われているスポーツ競技は多岐に渡るが，スポーツ競技の一つの分類方法として，競技時の人数の観点から集団競技と個人競技に分けることができる。本研究では，運動部の集団／個人の競技の違いが体罰の実態や意識に与える影響について探索的に検討する。

一方，運動部活動とは，多くの場合生徒自身の自発的・自主的な選択と参加によるものであり，原則的には参加者の意志によって入退部が行われる。しかし，運動部活動におけるさまざまな要因により，中途退部に至るケースも多い。運動部活動の中途退部に至る要因として，高校運動部員を対象とした青木（1988）[7)]の研究では，「人間関係の軋轢」「勉強との両立」「けが」などを挙げている。また，安田・遠藤・下川・布施・袴田・伊藤（2008）[8)]は「指導者との人間関係のストレス」を原因の一つとして指摘している。先述の一連の体罰研究で示されたように，運動部活動の指導者からの体罰が高い割合であることから推測すると，指導者との人間関係のストレスの中には，体罰に起因するものも存在する可能性が考えられる。さらに，その体罰へのストレスが中途退部に至る原因として機能することも考慮する必要がある。そこで本研究では，運動部へ入部している者，途中で退部や転部をした者，入部していない者といった運動部活動への所属状況の違いが，体罰の実態と意識に与える影響について検討する。

また，学年の違いと被体罰経験ならびに体罰容認態度との関連を検討した研究結果[2)3)4)]では，大学にて体罰排除教育を受けていない者（大学1年の4月時点）と受けた者（大学2～3年の4月時点）との間に顕著な違いが確認されている。これは高校と大学という環境の違いによると考えられ，大学入学直後から行われた体罰排除教育の効果の可能性を示すものである。このことは，入学時から体罰排除教育を受けてきた大学3年生に対する教育効果を検討した研究[9)]において，半数以上の学生が「効果がある」と回答していることからも推測することができる。これらの研究結果から，高校と大学の違いが，運動部活動の種類と所属状況に対して相互作用的に影響することが予測されるため，本研究では影響要因の一つとして取り上げることとする。

以上のことから，本研究では，運動部活動の種類ならびに所属状況に着目し，高校までの体罰経験を回答した大学1年生と，日本体育大学において体罰排除教育を受けた大学2～4年生の回答を比較した。部活動の種類としては，集団競技と個人競技に分類した。また部活動への所属状況は，①入部している，②入学後変更（入部後退部，途中で転部，途中で入部），③入部していない，の3種類に分類した。

目　的

本研究の目的は以下の2点である。

(1) 運動部活動の種類（集団競技／個人競技）と学年（1年生／2～4年生）の違いが，体罰の実態と意識に及ぼす影響ならびに体罰排除教育の効果を検討する。

(2) 運動部活動への所属状況（入部している／入学後変更／入部していない）と学年（1年生／2～4年生）の違いが，体罰の実態と意識に及ぼす影響ならびに体罰排除教育の効果を検討する。

方　法

1. 調査対象者

日本体育大学に所属する2016年度の1年生1,642名（男子：1,010名，女子630：名，性別未記入2名，平均年齢：18.03（*SD*=0.40）歳），2年生1,483名（男子：904名，女子：578名，性別未記入1名，平均年齢：19.10（*SD*=0.39）歳），3年生1,056名（男子：646名，女子：407名，性別未記入3名，平均年齢：20.12（*SD*=0.55）歳），4年生1,028名（男子：629名，女子：392名，性別未記入7名，平均年齢：21.13（*SD*=0.58）歳）を調査対象者とした。

2. 調査方法と調査期間

調査対象者へは，本調査の主旨を理解できるように，調査実施前に研究の目的，調査内容の説明を行い，同意を得られた者のみを対象とした。調査は集合調査法にて実施した。調査時期は，1年生では2016年4月上旬の新入生オリエンテーション期間中に，2～4年生では2016年4月中旬～下旬に当該学年を対象とする授

業において担当教員の協力を得て実施した。なお，本研究は日本体育大学倫理審査委員会の承認を受けた（承認番号第 015-H118 号）。

3. 調査項目

1 年生に対しては高校生活時, 2 年生に対しては大学に入学してからの 1 年間, 3 年生に対しては 2 年生からの 1 年間, 4 年生に対しては 3 年生からの 1 年間における期間に限定した体罰の実態について回答を求めた。

(1) プロフィールに関する項目

調査対象者に対し，年齢，学年，性別，所属学科，高校の種類，高校の都道府県について回答を求めた。

質問 1 は，1 年生の調査では「あなたは，高校生活でクラブ活動へ入っていましたか」の問いに，2 ～ 4 年生の調査では「あなたは，大学生活でクラブ活動へ入っていますか」の問いに, 1 年生に対しては「①入っていた」「②入っていたが，途中でやめた」「③入っていたが，途中で転部した」「④入っていなかったが，途中で入った」「⑤入っていなかった」2 ～ 4 年生に対しては「①入っている」「②入っていたが，途中でやめた」「③入っていたが，途中で転部した」「④入っていなかったが, 途中で入った」「⑤入っていなかった」から回答を求め，クラブ活動の種目は自由記述にて回答を求めた。

質問 2 は，1 年生の調査では「クラブ活動に入っていた方は，それはレギュラーでしたか」の問いに，2 ～ 4 年生の調査では「クラブ活動に入っている方は，それはレギュラーですか」の問いに，1 年生に対しては「①レギュラーだった」「②レギュラーでなかった」「③その他」2 ～ 4 年生に対しては「①レギュラーである」「②レギュラーでない」「③その他」から回答を求め，「③その他」は自由記述にて回答を求めた。

(2) 体罰に関する項目

質問 3 は，1 年生の調査では「あなたは，普段の高校生活やクラブ活動等で，他者から体罰を受けたことがありましたか。あるいは見聞きしたことがありましたか」の問いに, 2 ～ 4 年生の調査では「あなたは, 普段の大学生活やクラブ活動等で，他者から体罰を受けたことがありましたか。あるいは見聞きしたことがありましたか」の問いに,「①自分が体罰を受けたことがあった」「②他者が体罰を受けているところを見たことがあった」「③実際に見たことはないが, 体罰があるという噂を聞いたことがあった」「④体罰を受けたことも，見たことも，噂に聞いたこともなかった」から回答を求めた。なお，質問 3 ①～③の回答者に対しては質問 4 以降の回答を求め，質問 4 ④の回答者には質問 5 以降の回答を求めた。

質問 4 は（1）～（8）の質問項目で構成されている。「(1) それは, どのような行為でしたか」の問いに「①殴る，蹴る，物で叩く等の暴力」「②人格を否定するような暴言」「③教師あるいは指導者の立場を利用した威圧や脅し」「④その他」から回答を求め，「④その他」は自由記述にて回答を求めた。

「(2) それは, いつのことでしたか」の問いに「①授業中」「②休み時間」「③クラブ活動」「④その他」から回答を求め，「①授業中」の科目名，「③クラブ活動」の種目名，「④その他」は自由記述にて回答を求めた。

「(3) それは, 誰からでしたか」の問いに「①担任の教師」「②教科の教師」「③クラブ活動の内部の指導者」「④クラブ活動の外部の指導者」「⑤在校生（クラブ活動の先輩など）」「⑥その他」から回答を求め,「②教科の教師」の教科名,「⑥その他」は自由記述にて回答を求めた。

「(4) その頻度はどのぐらいでしたか」の問いに「①1 回のみ」「②複数回」「③日常的に」「④その他」から回答を求め，「②複数回」では回数を，「④その他」は自由記述にて回答を求めた。

「(5) それはどの程度のものでしたか」の問いに「①肉体的な苦痛を伴ったが，治療するまでのものではなかった」「②肉体的な苦痛を伴い, 治療を必要とするものだった」「③精神的な苦痛をともなうものであった」「④その他」から回答を求め，「④その他」は自由記述にて回答を求めた。

「(6)それを行った理由をどのように説明されましたか」の問いに「①授業中の態度が悪い」「②休み時間中の態度が悪い」「③クラブ活動中の態度が悪い」「④その他」から回答を求め,「④その他」は自由記述にて回答を求めた。

「(7) それを受けたり，見たりしたとき，どのように対処されましたか」の問いに「①他の教師や指導者に相談して解決を図った」「②誰にも相談することができずに, 一人で悩んだ」「③特に気にとめることもなかった」「④その他」から回答を求め，「④その他」は自由記述にて回答を求めた。

「(8) それについて, 今後どのような対応を考えていますか」の問いに「①原因になるようなことをしないように努めたい」「②他の教員や指導者に相談したい」「③第三者機関や通報窓口等があれば相談したい」「④特に考えていない」「⑤その他」から回答を求め，「⑤その他」は自由記述にて回答を求めた。

質問 5 は，1 年生の調査では「あなたは，高校生活で体罰を行ったことがありますか」2 ～ 4 年生の調査では「あなたは，大学生活で体罰を行ったことがありますか」の問いに「①ある」「②ない」から回答を求

表 1　個人種目と集団種目の分類

個人競技種目	アーチェリー	アクアスポーツ研究会	ウエイトリフティング	エアロビクス
	カヌー	キャンプ・インストラクター・アカデミー	ゴルフ	スカッシュ
	スキー	スケート	ソフトテニス	トライアスロン
	トランポリン	トレーナー研究会	なぎなた	バトミントン
	ヒップホップ同好会	フィンスイミング	フェンシング	ボクシング
	ライフセービング	レスリング		
	空手道	剣道	硬式テニス	合気道
	山岳	自転車競技	社会体育研究会	柔道
	少林寺拳法	水泳（競泳，飛込）	相撲	体育研究サークル
	体操	体操競技	卓球	陸上競技
集団競技種目	アメリカンフットボール	アルティメット	インラインホッケー	サッカー
	セパタクロー	ソフトボール	タッチラグビー	ダブルダッチサークル
	ダンス	チアリーダー	バスケットボール	バレーボール
	ハンドボール	ブラスバンド	ボート	ラグビー
	ラクロス			
	応援団	新体操	水泳（水球）	野球

め，「①ある」の回答者に対して「(1) それは，誰に対してでしたか」「(2) 体罰を行った理由は何でしたか」の問いに，自由記述にて回答を求めた。

質問 6 は「あなたは，学校における体罰をどのように考えていますか」の問いに，自由記述にて回答を求めた。

質問 7 は「あなたは，学校における体罰を撲滅するためには，何が必要だと考えていますか」の問いに，自由記述にて回答を求めた。

質問 8 は「あなたは『体罰』についてどのように考えていますか。該当するところに◯印を付けてください」の問いに「①容認している」「②どちらかというと容認している」「③どちらかというと容認していない」「④容認していない」から回答を求めた。

4. 分析方法

分析 1 では，1 年生（高校生のとき），2 ～ 4 年生（日体大入学後）に分類し，さらに，集団競技・個人競技に分類し，各質問項目における回答の頻度に対して χ^2 検定を行った。集団競技，個人競技の分類に関しては，公益財団法人日本体育協会[10] と松井（2015）[11] の分類を参考に，大学教員 4 名で協議し，表 1 のように分類した。

分析 2 では，大学に入学する前とした後とクラブ活動について分析するため，分析 1 と同様に 1 年生（高校生のとき），2 ～ 4 年生（日体大入学後）に分類し，さらに，質問 1 ①の回答者，質問 1 ②～④の回答者，質問 1 ⑤の回答者に分類し，各質問項目における回答の頻度に対して χ^2 検定を行った。分析 1・2 においては，統計処理ソフトウェア SAS9.4 を用いた。

結果と考察

各質問における回答の有無を集計したものである。「1 年生」は，新入生が高校生のときの体罰（先輩が後輩に対して行う暴力も含む）の経験について回答した内容である。「2 ～ 4 年生」は，2 年生以上の在学生の回答内容である。

分析 1 の「個人」と「集団」については，競技種目を分類したものである（表 1）。

分析 2 の「在籍」は，質問 1 の回答で「①入っている」に回答した者，「変更」は質問 1 の回答で「②入っていたが，途中でやめた」，「③入ったが途中で転部した」，「④入っていなかったが，途中で入った」に回答した者，「非在籍」は，「入っていない」に回答した者を分類したものである。

分析 1　学年と所属クラブ

【質問 3】あなたは，普段の（高校・大学）生活やクラブ活動等で，他者から体罰を受けたことがありましたか。あるいは見聞きしたことがありましたか。

①自分が体罰を受けたことがあった

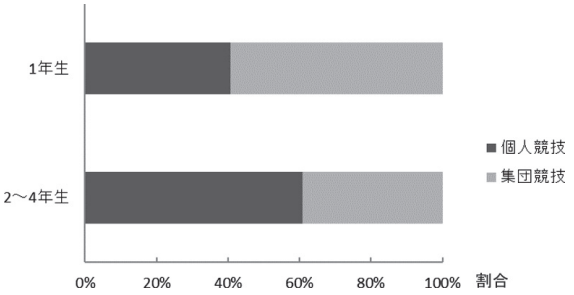

図 1　質問 3－①

クロス集計の結果，1 年生は 54 名，2 ～ 4 年生は 97 名の回答があった。「1 年生／個人」は，40.74％（22 名），「1 年生／集団」は，59.26％（32 名）の回答数であった。「2 ～ 4 年生／個人」は，60.82％（59 名），「2 ～ 4 年生／集団」は, 39.18％（38 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果, 有意な差が認められた（$\chi^2(1, N=151)=5.63, p<.05$）。

【質問 3】あなたは，普段の（高校・大学）生活やクラブ活動等で，他者から体罰を受けたことがありましたか。あるいは見聞きしたことがありましたか。

②他者が体罰を受けているところをみたことがあった

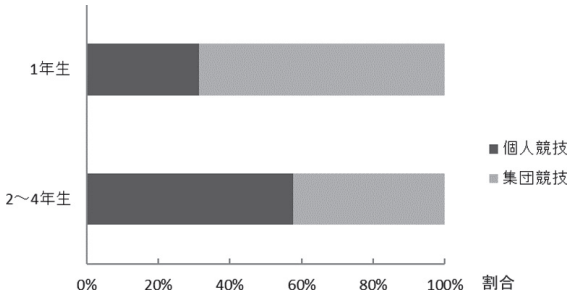

図 2　質問 3－②

クロス集計の結果, 1 年生は 89 名, 2 ～ 4 年生は 118 名の回答があった。「1 年生／個人」は，31.46％（28 名），「1 年生／集団」は，68.54％（61 名）の回答数であった。「2 ～ 4 年生／個人」は，57.63％（68 名），「2 ～ 4 年生／集団」は, 42.37％（50 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果, 有意な差が認められた（$\chi^2(1, N=207)=13.97$, df=1, $p<.001$）。

【質問 3】あなたは，普段の（高校・大学）生活やクラブ活動等で，他者から体罰を受けたことがありましたか。あるいは見聞きしたことがありましたか。

③実際に見たことはないが，体罰があるという噂を聞いたことがあった

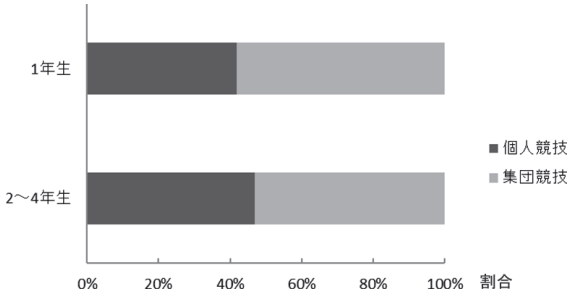

図 3　質問 3－③

クロス集計の結果，1 年生は 103 名，2 ～ 4 年生は 275 名の回答があった。「1 年生／個人」は，41.75％（43 名），「1 年生／集団」は，58.25％（60 名）の回答数であった。「2 ～ 4 年生／個人」は，46.91％（129 名），「2 ～ 4 年生／集団」は，53.09％（146 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意な差が認められなかった。

【質問 3】あなたは，普段の（高校・大学）生活やクラブ活動等で，他者から体罰を受けたことがありましたか。あるいは見聞きしたことがありましたか。

④体罰を受けたことも，見たことも，噂に聞いたこともなかった

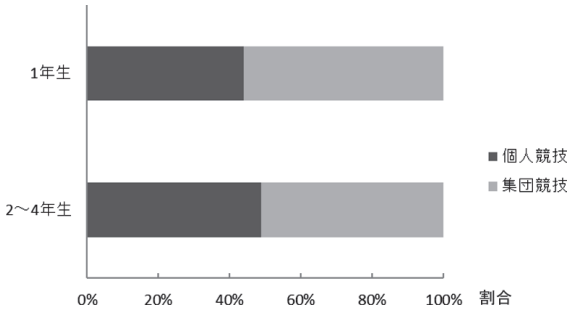

図 4　質問 3－④

クロス集計の結果，1 年生は 1204 名，2 ～ 4 年生は 1925 名の回答があった。「1 年生／個人」は，44.02％（530 名），「1 年生／集団」は，55.98％（674 名）の回答数であった。「2 ～ 4 年生／個人」は，48.88％（941 名），「2 ～ 4 年生／集団」は，51.12％（984 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意な差が認められた（$\chi^2(1, N=3129)=7.03, p<.01$）。

【質問 3】の考察

「体罰を受けたことがある」,「体罰を見聞きしたことがある」という質問に回答した者の中で,「自分が体罰を受けたことがある」と回答した学生,「他者が体罰を受けているところをみたことがあった」と回答した学生において，高校生活と大学生活，個人競技と集団競技において違いが認められた。1 年生（高校生活）と 2 ～ 4 年生（大学生活）においては，個人競技と集団競技に回答した結果に方向性に違いがあった。1 年生では「集団競技において体罰を経験した」,「他者が体罰を受けているところみた」という回答が多かったのに対して，2 ～ 4 年生では，個人競技のほうに回答した割合が増えていた。安田ら（2008）[8] や大学の運動部活動は競技志向性が高いことがうかがえ，競技力向上のための指導は不可欠であると述べている。この「競技力向上のため指導は不可欠である」という考えに基づく指導の内容が，高校と大学では異なっていること

が考えられる。そのため，高校生活と大学生活において，個人競技と集団競技とで回答に違いがあったのではないかと考えられる。

一方,「体罰の目撃経験がある」と回答した学生においては,「1 年生／個人」の回答人数が期待値より有意に少なかった。安田ら（2008）[8] によると高校時代は長時間の練習を行うことを余儀なくされると述べていることから，個人競技は集団競技と比べて，閉鎖的環境下での練習が考えられるため，他者を目にする習慣や機会が少ないことが考えられる。

【質問 4】（1）それは，どのような行為でしたか。
①殴る，蹴る，物で叩く等の暴力

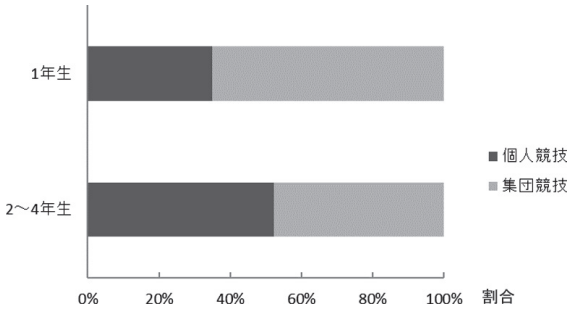

図 5　質問 4（1）－①

クロス集計の結果，1 年生は 177 名，2 ～ 4 年生は 348 名の回答があった。「1 年生／個人」は，35.03％（62 名),「1 年生／集団」は，64.97％（115 名）の回答数であった。「2 ～ 4 年生／個人」は, 53.3％（182 名),「2 ～ 4 年生／集団」は，47.7％（166 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意な差が認められた（$\chi^2(1, N=525)=14.07, p<.001$）。

【質問 4】（1）それは，どのような行為でしたか。
②人格を否定するような暴言

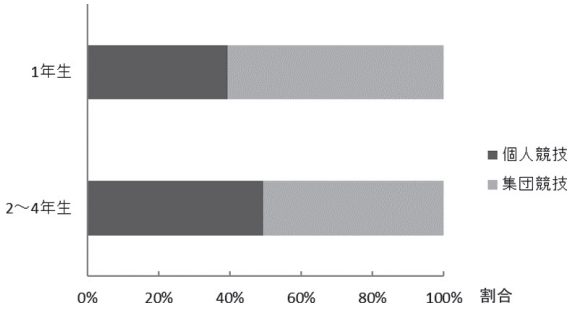

図 6　質問 4（1）－②

クロス集計の結果, 1 年生は 71 名, 2 ～ 4 年生は 150 名の回答があった。「1 年生／個人」は，39.44％（28 名),「1 年生／集団」は，60.56％（43 名）の回答数であった。「2 ～ 4 年生／個人」は，49.33％（74 名),「2 ～ 4 年生／集団」は, 50.67％（76 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意な差が認められなかった。

【質問 4】（1）それは，どのような行為でしたか。
③教師あるいは指導者の立場を利用した威圧や脅し

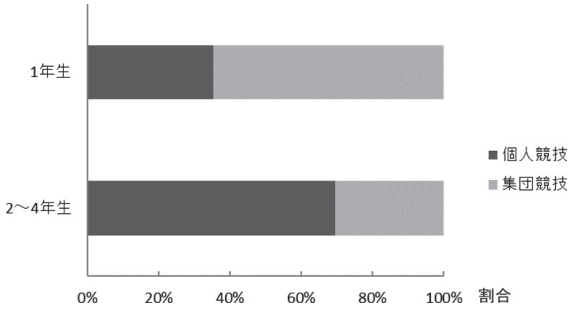

図 7　質問 4（1）－③

クロス集計の結果，1 年生は 34 名，2 ～ 4 年生は 56 名の回答があった。「1 年生／個人」は，35.29％（12 名),「1 年生／集団」は，64.71％（22 名）の回答数であった。「2 ～ 4 年生／個人」は，69.64％（39 名),「2 ～ 4 年生／集団」は, 30.36％（17 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果, 有意な差が認められた（$\chi^2(1, N=90)=10.16, p<.01$）。

【質問 4】（1）の考察

「体罰を受けたことがある」,「体罰を見聞きしたことがある」という質問に回答した者の中で,「それは，どのような行為」だったかということで,「人格を否定するような暴言」と回答した学生においては，高校生活と大学生活，個人競技と集団競技に違いが認められなかった。長谷川（2016）[12] は，部活動という閉鎖的な空間のなかでは，指導者（教員），選手（生徒・学生）という絶対的な服従関係を作り出しやすいと述べている。このことから，高校生活と大学生活，個人競技と集団競技に関連性はなかったことが示唆される。

「殴る，蹴る，物で叩く等の暴力」と「教師あるいは指導者の立場を利用した威圧や脅し」に回答した学生においては,「1 年生／個人」の回答人数が期待値より有意に少なく,「1 年生／集団」の回答人数が期待値より有意に多かった。阿江（1990）[13] は，暴力を振るう指導者の特徴として，20 代，30 代と若く，礼儀，規則などに厳しい生活指導重視型で，集団スポーツ種目を指導している教員が多いと述べている。また高校は大学と違い，限られた環境下での指導を強いられることや指導者の人数も大学よりも少ないことが考えられる。これらのことから，暴力を受けた経験に関して，大学生活よりも高校生活，かつ個人競技よりも集団競技で回答が多くなったのではないかと考えられる。

【質問 4】(2) それは，いつのことでしたか。
①授業中

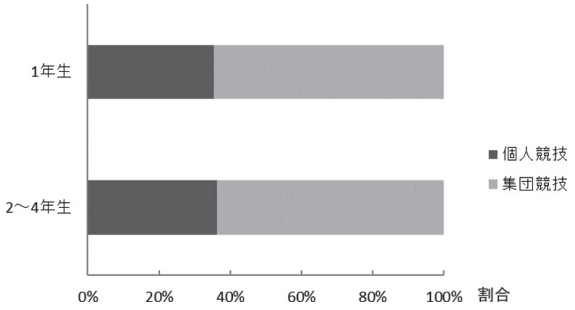

図 8　質問 4 (2) − ①

クロス集計の結果，1 年生は 17 名，2 ～ 4 年生は 11 名の回答があった。「1 年生／個人」は，35.29％（6 名），「1 年生／団体」は，64.71％（11 名），「2 ～ 4 年生／個人」は，36.36％（4 名），「2 ～ 4 年生／個人」は，63.64％（7 名）の回答数であった。

χ^2 検定の結果，有意な差は認められなかった。

【質問 4】(2) それは，いつのことでしたか。
②休み時間

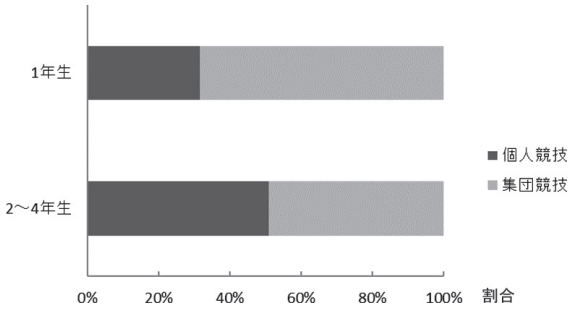

図 9　質問 4 (2) − ②

クロス集計の結果，1 年生は 31 名，2 ～ 4 年生は 37 名の回答があった。「1 年生／個人」は，31.58％（6 名），「1 年生／団体」は，68.42％（13 名），「2 ～ 4 年生／個人」は，51.02％（25 名），「2 ～ 4 年生／個人」は，48.98％（24 名）の回答数であった。

χ^2 検定の結果，有意な差は認められなかった。

【質問 4】(2) それは，いつのことでしたか。
③クラブ活動

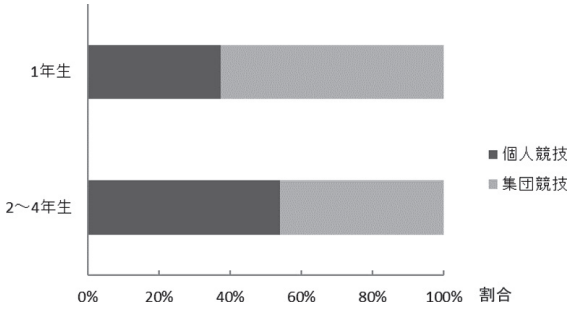

図 10　質問 4 (2) − ③

クロス集計の結果，1 年生は 190 名，2 ～ 4 年生は 309 名の回答があった。「1 年生／個人」は，37.37％（71 名），「1 年生／団体」は，62.63（119 名），「2 ～ 4 年生／個人」は，54.05％（167 名），「2 ～ 4 年生／個人」は，45.95％（142 名）の回答数であった。

χ^2 検定を行った結果，1％水準で有意な差が認められた（$\chi^2(1, N=499)=13.12, p<.01$）。1 年生生の個人競技が 5％水準で有意に低い値を示した（$p<.05$）。

【質問 4】(2) の考察

クラブ活動と回答した高校の個人競技をしていた学生にとって，クラブ活動では体罰を受けたり，見聞きしたりすることが少なかったことが明らかとなった。このことは，高校の個人競技においては，個人に任されて練習が行われることが多いため，指導者からの指導と称してのかたちで体罰が起こらなかったのではないかと考えられる。このような環境は，福島（2013）[14] が示す，「教育現場を一種の『閉じた空間』とする発想が残っている可能性」があるといえるであろう。体育教育における悪しき伝統として残され，今日に至っている背景は，生徒の心理を巧みに利用した指導といえよう。一例を挙げると，体罰による見せしめのような環境から逃れたい一心で，監督やコーチの考えに即した内容の言動や行動を必要以上にアピールしていたのではないかとも考えられる。実際に，いわゆる授業という枠のなかでは，他の生徒の存在から体罰が行われることのむずかしさがあげられるが，クラブ活動では自主的に参加し行っているということを前提にした指導がこれまで行われてきたと考えられる。

一方，生徒にとっても監督やコーチから嫌われないようにという防衛の心理が働き，たとえ体罰を受けたとしても，体罰であると声に出すことができなかったり，またその場から逃げだすことができなかったのではないかと考えられる。

【質問 4】(3) それは，誰からでしたか。
①担任の教師

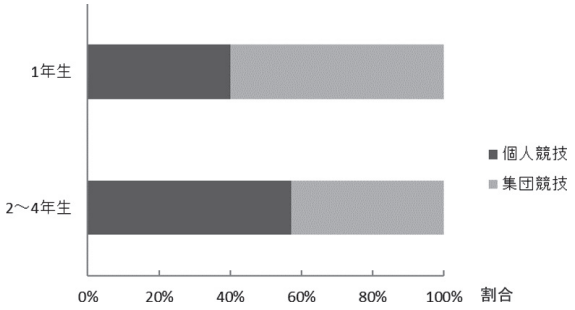

図 11　質問 4（3）－①

クロス集計の結果，1 年生は 10 名，2 ～ 4 年生は 14 名の回答があった。「1 年生／個人」は, 40.0％（4 名），「1 年生／団体」は，60.0％（6 名），「2 ～ 4 年生／個人」は, 57.14％（8 名）,「2 ～ 4 年生／個人」は, 42.86％（6 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果, 有意な差は認められなかった。

【質問 4】(3) それは，誰からでしたか。
②教科の教師

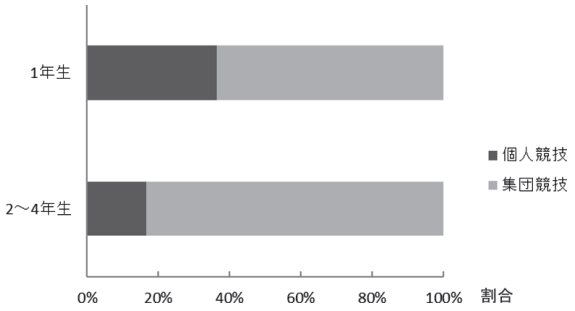

図 12　質問 4（3）－②

クロス集計の結果，1 年生は 22 名，2 ～ 4 年生は 6 名の回答があった。「1 年生／個人」は，36.36％（6 名），「1 年生／団体」は，63.64％（14 名），「2 ～ 4 年生／個人」は，16.67％（1 名），「2 ～ 4 年生／個人」は, 83.33％（5 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果, 有意な差は認められなかった。

【質問 4】(3) それは，誰からでしたか。
③クラブ活動の内部の指導者

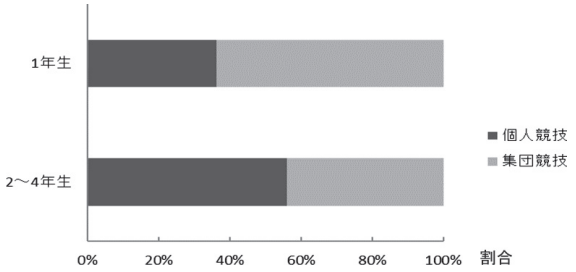

図 13　質問 4（3）－③

クロス集計の結果，1 年生は 160 名，2 ～ 4 年生は 134 名の回答があった。「1 年生／個人」は，36.25％（58 名），「1 年生／団体」は，63.75％（102 名），「2 ～ 4 年生／個人」は，55.97％（75 名），「2 ～ 4 年生／個人」は，44.03％（59 名）の回答数であった。χ^2 検定を行った結果, 1％水準で有意な差が認められた（$\chi^2(1, N=294)=11.45, p<.01$）。

【質問 4】(3) それは，誰からでしたか。
④クラブ活動の外部の指導者

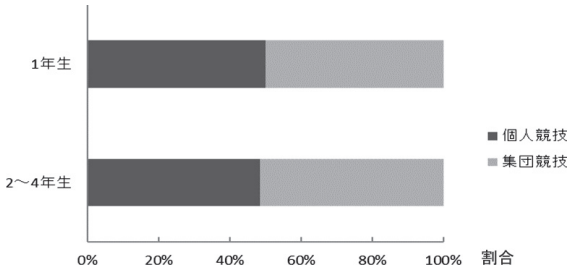

図 14　質問 4（3）－④

クロス集計の結果，1 年生は 14 名，2 ～ 4 年生は 31 名の回答があった。「1 年生／個人」は, 50.0％（7 名），「1 年生／団体」は，50.0％（7 名），「2 ～ 4 年生／個人」は，33.33％（15 名），「2 ～ 4 年生／個人」は，35.56％（16 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果, 有意な差は認められなかった。

【質問 4】(3) それは，誰からでしたか。
⑤在校生

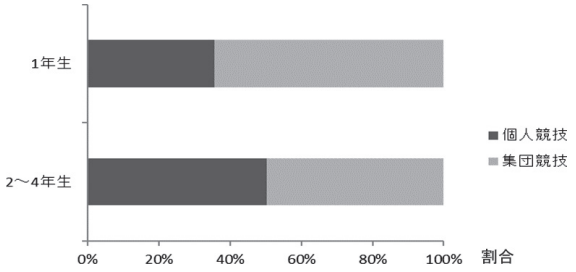

図 15　質問 4（3）－⑤

クロス集計の結果，1 年生は 42 名，2 ～ 4 年生は 268 名の回答があった。「1 年生／個人」は，4.84％（15 名），「1 年生／団体」は，8.71％（27 名），「2～4 年生／個人」は，43.55％（135 名），「2 ～ 4 年生／個人」は，42.90％（133 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意な差は認められなかった。

【質問 4】（3）の考察

クラブ活動の内部指導者のみに有意な差が認められた。体罰経験や体罰を見たり聞いたりしていたことは，クラブ活動の学校関係者によるものであったと考えられる。このことは，クラブ活動という枠だけでにはとらわれず，学校生活の様子を熟知している教諭・教員が当てはまると考えられる。日ごろから様子を見ている存在ゆえに，なにかのきっかけで，このような「体罰」という行動をおこなったのであろうと考えられる。高校生活において個人競技よりも集団競技のほうで回答数が多かったことは，高校と大学という学校の種類の違いもあるが，競技成績を上げようとすることによるものではないかと考えられる。

1970 年代の運動部活動が活発な時代において，基本的にはその学校の教員が部活動を教え，その流れで今日に至っている。近年は外部指導者の導入により，教員以外の人材が学校にて指導ができる環境が整ってきた。そのような外部指導者よりもいわゆる教員が部活動を指導し，その中で行われる「体罰」が比較的目立ち，また生徒の心に深い傷を負っていることが考えられる。

【質問 4】（4）その頻度はどのくらいでしたか。
①１回のみ

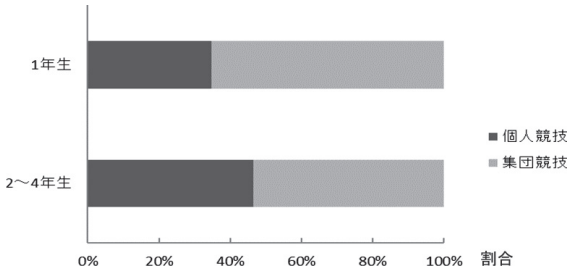

図 16　質問 4（4）－①

クロス集計の結果，「①１回のみ」と回答した学生は 204 名であった。そのうち，1 年生は 75 名，2 ～ 4 年生は 129 名の回答があった。「1 年生／個人」は 12.75％（26 名），「1 年生／集団」は 24.02％（49 名）であった。「2 ～ 4 年生／個人」は 29.41％（60 名），「2 ～ 4 年生／集団」は 33.82％（69 名）であった。この回答について，高校と大学，個人競技と集団競技を基準に χ^2 検定を行ったところ，有意な差は認められなかった。

【質問 4】（4）その頻度はどのくらいでしたか。
②複数回

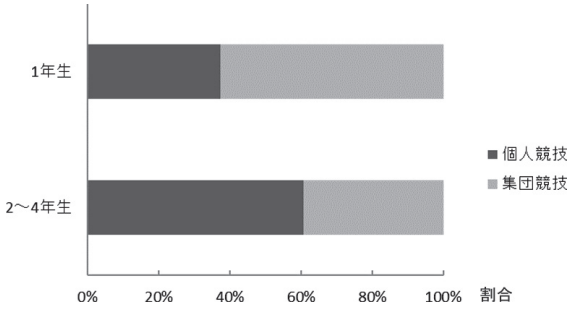

図 17　質問 4（4）－②

クロス集計の結果，「②複数回」と回答した学生は 243 名であった。そのうち，1 年生は 88 名，2 ～ 4 年生は 155 名の回答があった。「1 年生／個人」が 13.58％（33 名），「1 年生／集団」が 22.63％（55 名）であった。また，「2 ～ 4 年生／個人」が 38.68％（94 名），「2 ～ 4 年生／集団」が 25.10％（61 名）であった。この回答について，高校と大学，個人競技と集団競技を基準に χ^2 検定により独立性の検定を行ったところ，回答人数比率に有意な差が認められた（$\chi^2(1,\ N=243)=12.05,\ p<.05$）。

【質問 4】（4）その頻度はどのくらいでしたか。
③日常的に

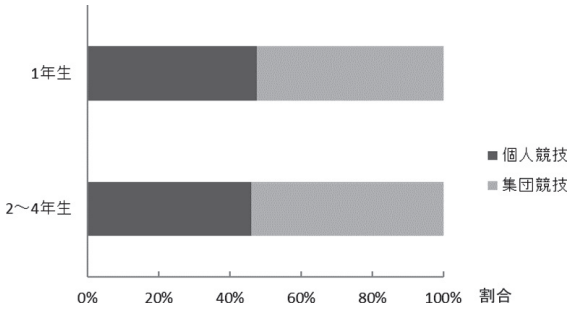

図 18　質問 4（4）－③

クロス集計の結果，「③日常的に」と回答した学生は 120 名であった。そのうち，1 年生は 42 名，2 ～ 4 年生は 78 名の回答があった。「1 年生／個人」が 16.67％（20 名），「1 年生／集団」が 18.33％（22 名）であった。また，「2 ～ 4 年生／個人」が 30.00％（36 名），「2 ～ 4 年生／集団」が 35.00％（42 名）であった。この回答について，高校・大学，個人競技と集団競技を基準に χ^2 検定を行ったところ，有意な差は認められなかった。

【質問 4】（4）の考察

「その頻度はどのくらいでしたか」という質問に回答した学生で，「1 回のみ」と「日常的に」という回答については，有意な差は認められなかったものの，「複数

回」については，有意な差が認められた。高校生活と大学生活とで比較してみると，高校生活の集団競技において多くの回答があった。このことは，今村・大塚（1996）[15]は，個人よりも団体競技種目により多くの被害が認められたと報告している。今回の調査結果も，今村・大塚の結果を支持するものといえよう。

また，その理由は不明であるが，大学生活においては，集団競技よりも個人競技において「複数回」という回答が多かった。その理由を明らかにするためには，さらに細かく部の種類について検討を行う必要があると考えられる。

【質問 4】（5）それは，どの程度のものでしたか。
①肉体的な苦痛を伴ったが，治療するまでのものではなかった

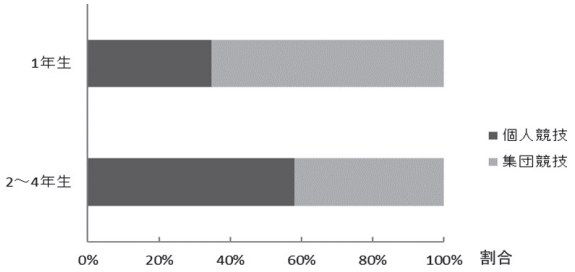

図 19　質問 4（5）－①

クロス集計の結果，「①肉体的な苦痛を伴ったが，治療するまでのものではなかった」と回答した学生は 370 名であった。そのうち，1 年生は 141 名，2 ～ 4 年生は 229 名の回答があった。「1 年生／個人」が 34.75％（49 名），「1 年生／集団」が 65.25％（92 名）であった。また，「2 ～ 4 年生／個人」が 58.08％（133 名），「2 ～ 4 年生／集団」が 41.92％（96 名）であった。この回答について，1 年生と 2 ～ 4 年生，個人競技と集団競技を基準に χ^2 検定を行ったところ，有意な差は認められた（$\chi^2(1, N=370)=18.99, p<.001$）。

【質問 4】（5）それは，どの程度のものでしたか。
②肉体的な苦痛を伴い，治療を必要とするものだった

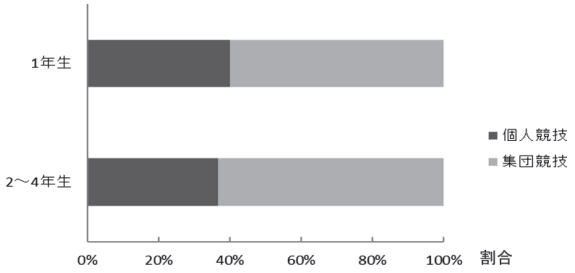

図 20　質問 4（5）－②

クロス集計の結果，「②肉体的な苦痛を伴い，治療を必要とするものだった」と回答した学生は 51 名であった。そのうち，1 年生は 10 名，2 ～ 4 年生は 41 名の回答があった。「1 年生／個人」が 40.0％（4 名），「1 年生／集団」が 60.0％（6 名）であった。また，「2 ～ 4 年生／個人」が 36.59％（15 名），「2 ～ 4 年生／集団」が 63.41％（26 名）であった。この回答について，1 年生と 2 ～ 4 年生，個人競技と集団競技を基準に χ^2 検定を行ったところ，有意な差は認められなかった。

【質問 4】（5）それは，どの程度のものでしたか。
③精神的な苦痛をともなうものであった

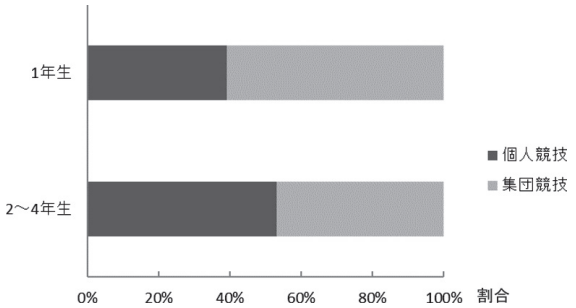

図 21　質問 4（5）－③

クロス集計の結果，「③精神的な苦痛をともなうものであった」と回答した学生は 233 名であった。そのうち，1 年生は 69 名，2 ～ 4 年生は 164 名の回答があった。「1 年生／個人」が 39.13％（27 名），「1 年生／集団」が 60.87％（42 名）であった。また，「2 ～ 4 年生／個人」が 53.05％（87 名），「2～4 年生／集団」が 46.95％（77 名）であった。この回答について，1 年生と 2 ～ 4 年生，個人競技と集団競技を基準に χ^2 検定を行ったところ，有意な差は認められなかった。

【質問 4】（5）の考察

「肉体的な苦痛を伴ったが，治療するまでのものではなかった」という質問に対してのみ，有意な差が認められた。高校生活においては，個人競技よりも集団競技において，回答した人数が多かった。このことは，勝利主義が部活動の過熱化を招き，閉鎖的空間における弱者への「暴力的行為」が増幅されているという今村・大塚（1996）[15]の報告を支持するものであった。

大学生活においては，集団競技よりも個人競技において回答した人数が多かった。その理由を明らかにするためには，さらに細かく部の種類について検討を行う必要があると考えられる。

【質問 4】(6) それを行った理由をどのように説明されましたか。
①授業中の態度が悪い

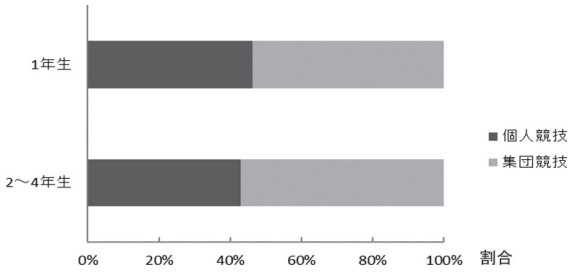

図 22　質問 4（6）－①

質問 4（6）の①「授業中の態度が悪い」において，40 名の回答が得られた。「1 年生／個人」が 46.15%（12 名），「1 年生／集団」が 53.85%（14 名），「2 ～ 4 年生／個人」が 42.86%（6 名），「2 ～ 4 年生／集団」が 57.14%（8 名）であった。そこで，χ^2 検定を行った結果，有意な差は認められなかった。

【質問 4】(6) それを行った理由をどのように説明されましたか。
②休み時間中の態度が悪い

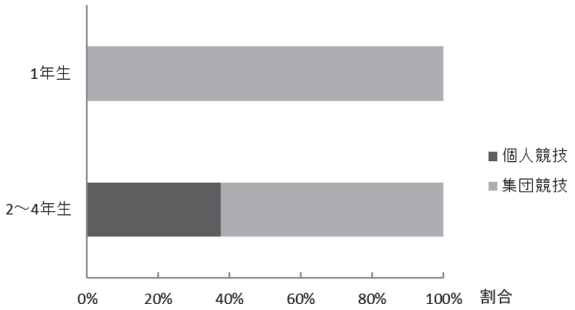

図 23　質問 4（6）－②

質問 4（6）の②「休み時間中の態度が悪い」において，20 名の回答が得られた。「1 年生／個人」が 0 名（0%），「1 年生／集団」が 100%（4 名），「2 ～ 4 年生／個人」が 37.5%（6 名），「2 ～ 4 年生／集団」が 62.5%（10 名）であった。そこで，χ^2 検定を行った結果，有意な差は認められなかった。

【質問 4】(6) それを行った理由をどのように説明されましたか。
③クラブ活動中の態度が悪い

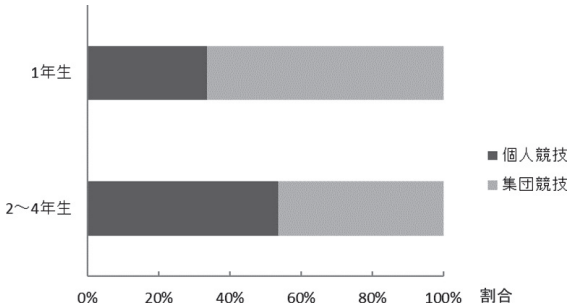

図 24　質問 4（6）－③

質問 4（6）の③「クラブ活動中の態度が悪い」において，388 名の回答が得られた。「1 年生／個人」が 33.58%（45 名），「1 年生／集団」が 66.42%（89 名），「2 ～ 4 年生／個人」が 53.54%（136 名），「2 ～ 4 年生／集団」が 46.46%（118 名）であった。そこで，χ^2 検定を行った結果，有意な差が認められた（$\chi^2(1, N=388)=14.04, p<.001$）。

【質問 4】(6) の考察

「クラブ活動中の態度が悪い」において，高校生活の個人競技と集団競技で有意な差が認められた。このことは，高校生の時に受けたことがある体罰経験者は，個人種目よりも集団種目のクラブ活動を行っていた者が多いという結果となった。クラブ間における体罰について，冨江（2008）[16] は，中学校・高等学校における運動部活動における調査を行っており，その結果，個人種目よりも，集団種目において体罰経験率が高かったことを報告している。さらに，集団種目は，集団としてのチームを統制する必要がより大きいため，体罰が行われる可能性が高いことを述べていた[16]。また，集団競技は，コーチや監督など指導者が，チームをコントロールできる場合が多々ある。例えば，メンバーの決定や選手の交代，タイムアウトの請求や指示など様々である。このことからも，集団競技は，指導者が選手をコントロールしやすい環境となっていることも体罰が発生する一つの要因であると考えられる。今後は，集団種目について，さらに調査を行い，どのような競技で体罰を多く発生しているのかを明らかにしていく必要があると考えられる。

【質問 4】(7) それを受けたり，見たりしたとき，どのように対処されましたか。
①他の教員や指導者に相談して解決を図った

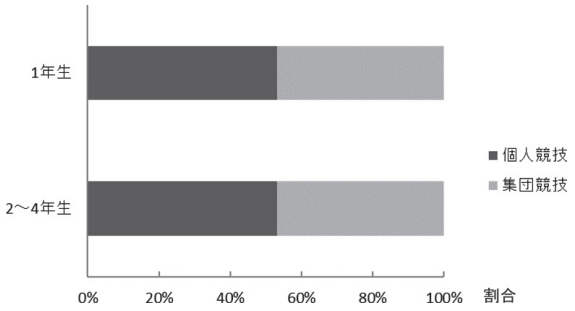

図 25　質問 4 (7) − ①

質問 4 (7) の①「他の教員や指導者に相談して解決を図った」において, 81 名の回答が得られた。「1 年生／個人」が 53.13％（17 名),「1 年生／集団」が 46.88％（15 名),「2 ～ 4 年生／個人」が 53.05％（26 名),「2 ～ 4 年生／集団」が 46.94％（23 名）であった。そこで，χ^2 検定を行った結果，有意な差は認められなかった。

【質問 4】(7) それを受けたり，見たりしたとき，どのように対処されましたか。
②誰にも相談することができずに，一人で悩んだ

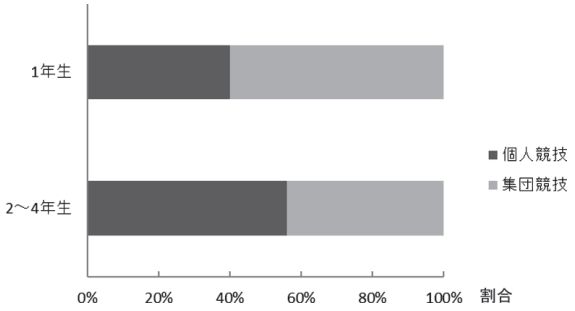

図 26　質問 4 (7) − ②

質問 4 (7) の②「誰にも相談することができず，一人で悩んだ」において, 74 名の回答が得られた。「1 年生／個人」が 40.0％（6 名),「1 年生／集団」が 12.2％（9 名),「2 ～ 4 年生／個人」が 55.93％（33 名),「2 ～ 4 年生／集団」が 44.07％（26 名）であった。そこで，χ^2 検定を行った結果，有意な差は認められなかった。

【質問 4】(7) それを受けたり，見たりしたとき，どのように対処されましたか。
③特に気にとめることもなかった

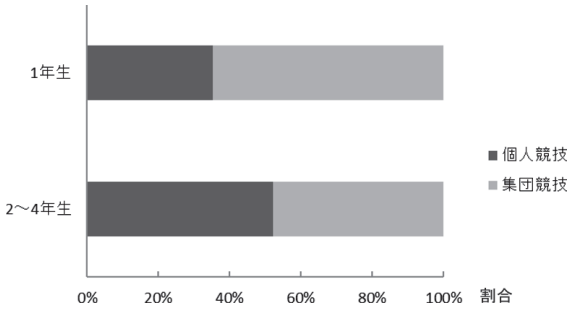

図 27　質問 4 (7) − ③

質問 4 (7) の③「特に気にとめることもなかった」において，356 名の回答が得られた。「1 年生／個人」が 35.17％（51 名),「1 年生／集団」が 64.83％（94 名),「2 ～ 4 年生／個人」が 52.13％（110 名),「2 ～ 4 年生／集団」が 47.87％（101 名）であった。そこで，χ^2 検定を行った結果，有意な差が認められた（$\chi^2(1, N=356)=9.98, p<.01$）。

【質問 4】(7) の考察

全ての質問項目において有意な差は認められなかった。しかしながら「他の教員や指導者に相談して解決を図った」においては，高校生よりも大学生の方に回答者が多かった。これは，学生が本学での教育排除教育を受けることにより，体罰に対して，どのように対処すれば良いかを理解している結果と捉えることができる。しかし，その一方で「特に気にとめることもなかった」と回答している者が 356 名であった。これは，全回答者の 7 割を占めている。その理由としては，体罰についての知識と理解や，対処法という情報量の不足が原因として考えられる。文部科学省（2013）[17] は，「体罰根絶に向けた取組の徹底について（通知）」で，「報告及び相談の徹底」を掲げている。これによると，「学校の管理職は，教員が体罰や体罰と疑われる行為（以下「体罰等」という。）を行った場合に，教員が管理職等へ直ちに報告や相談を行う環境を整備すること」と述べられている。しかしながら，生徒及び学生側の体罰における対応については述べられていない。それゆえに，「未然に防ぐ」と「受けてしまったとき」というアンビバレントな教育との対処法が必要であると考えられる。これらのことが，実現化することによって，これまで以上の体罰根絶が促されることと推察される。

【質問 4】(8) それについて，今後どのような対応を考えていますか。
①原因になるようなことをしないように努めたい

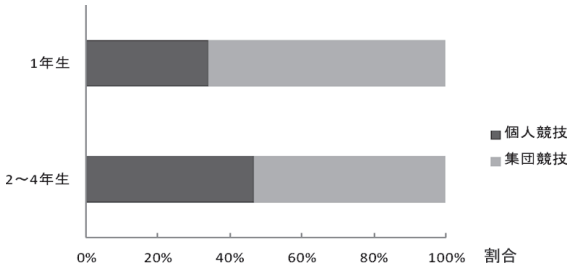

図 28　質問 4 (8) －①

クロス集計の結果, 1 年生は 82 名, 2 ～ 4 年生は 137 名の回答があった。「1 年生／個人」は，34.15％（28 名），「1 年生／集団」は，65.85％（54 名），「2 ～ 4 年生／個人」は，46.72％（64 名），「2 ～ 4 年生／集団」は，53.28％（73 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意な差は認められなかった。

【質問 4】(8) それについて，今後どのような対応を考えていますか。
②他の教員や指導者に相談したい

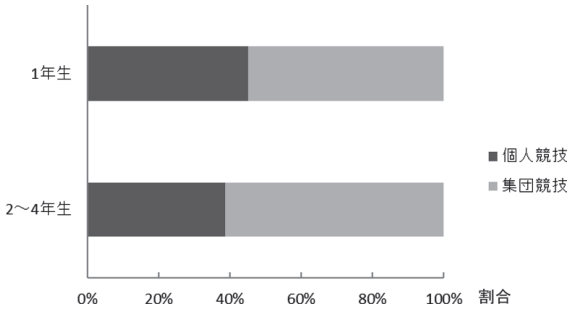

図 29　質問 4 (8) －②

クロス集計の結果，1 年生は 40 名，2 ～ 4 年生は 44 名の回答があった。「1 年生／個人」は，45.0％（18 名），「1 年生／集団」は，55.0％（22 名），「2 ～ 4 年生／個人」は, 38.64％（17 名），「2 ～ 4 年生／集団」は, 61.36％（27 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果, 有意な差は認められなかった。

【質問 4】(8) それについて，今後どのような対応を考えていますか。
③第三者機関や通報窓口等があれば相談したい

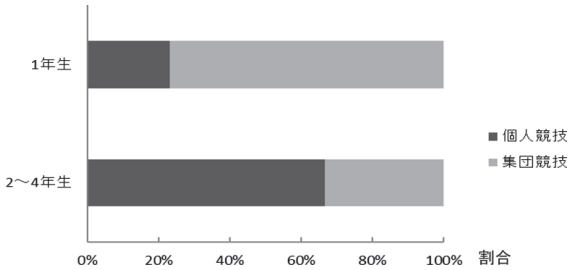

図 30　質問 4 (8) －③

クロス集計の結果，1 年生は 13 名，2 ～ 4 年生は 69 名の回答があった。「1 年生／個人」は，23.08％（3 名），「1 年生／集団」は，66.67％（10 名），「2 ～ 4 年生／個人」は，76.92％（46 名），「2 ～ 4 年生／集団」は，33.33％（23 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意差が認められた（$\chi^2(1, N=82)=8.64, p<.01$）。

【質問 4】(8) それについて，今後どのような対応を考えていますか。
④特に考えていない

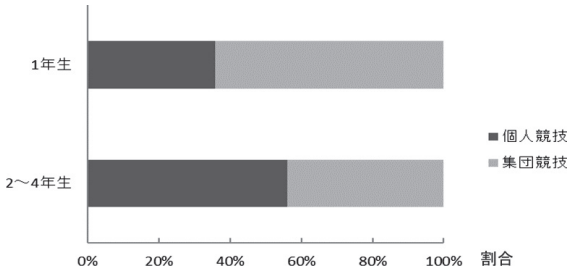

図 31　質問 4 (8) －④

クロス集計の結果, 1 年生は 89 名, 2 ～ 4 年生は 162 名の回答があった。「1 年生／個人」は，35.96％（32 名），「1 年生／集団」は，64.04％（57 名），「2 ～ 4 年生／個人」は，56.17％（91 名），「2 ～ 4 年生／集団」は，43.83％（71 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意差が認められた（$\chi^2(1, N=251)=9.40, p<.01$）。

【質問 4】(8) の考察

「今後どのような対応」を考えているかということで,「原因になるようなことをしないように努めたい」,「他の教員や指導者に相談したい」,「第三者機関や通報窓口等があれば相談したい」,「特に考えていない」という回答者について集計した。先行研究（谷釜ら, 2016）[4] では, 今後の対応についての回答は学年による影響は受けず，特に考えていないという学生の割合は高かった。本調査では,「第三者機関や通報窓口等があ

れば相談したい」と「特に考えていない」の質問に有意な差が認められた。「第三者機関や通報窓口等があれば相談したい」と回答した2～4年生は64名であり，個人競技が46名，集団競技が23名という回答数であった。このことは，本学が進めている体罰排除教育の効果であると考えられる。また「特に考えていない」と回答した学生たちを今後どのように扱うのかが今後の課題であると考えられる。有意ではないものの，「原因になるようなことをしないように努めたい」と回答した1年生の人数は，個人競技が28名，集団競技が54名であった。理由は不明であるが，高校生活での体罰経験から受動的態度[18]をとるようになっているのではないかと推察される。

【質問5】あなたは，高校生活で体罰を行ったことがありますか。

①ある

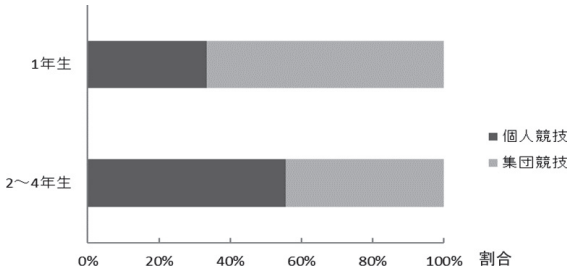

図32　質問5－①

クロス集計の結果，1年生は6名，2～4年生は9名の回答があった。「1年生／個人」は，33.33%（2名），「1年生／集団」は，66.67%（4名），「2～4年生／個人」は，55.56%（5名），「2～4年生／集団」は，44.44%（4名）の回答数であった。χ^2検定の結果，有意な差は認められなかった。

【質問5】あなたは，高校生活で体罰を行ったことがありますか。

②ない

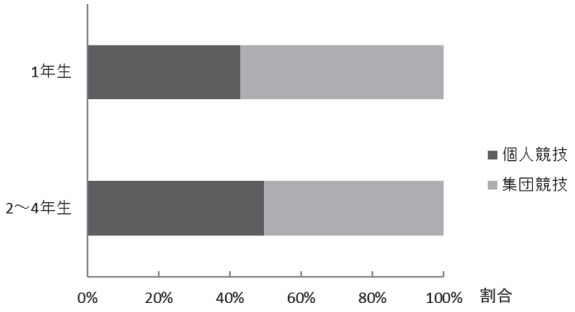

図33　質問5－②

クロス集計の結果，1年生は1428名，2～4年生は2383名の回答があった。「1年生／個人」は，42.93%（613名），「1年生／集団」は，57.07%（815名），「2～4年生／個人」は，49.52%（1180名），「2～4年生／集団」は，50.48%（1203名）の回答数であった。χ^2検定の結果，有意差が認められた（$\chi^2(1, N=3811)=15.56, p<.01$）。

【質問5】の考察

1897年の体罰禁止規定以降，文部科学省による2013年の「体罰禁止及び児童生徒理解に基づく指導の徹底について」の通知にいたるまで，「体罰」は悪しきものとされてきている。しかし，体罰を受けた者は体罰を肯定する傾向（楠本・立石・三村・岩本，1998）[19]があり，「体罰」の根絶は非常に困難なものとされてきた。そのようななかで，日本体育大学が2013年より取り組んできている体罰排除教育では，「反体罰・反暴力宣言」が教職員の共通認識とされ，運動部に学長が直接出向いて指導をし，アンケートの実施による現状の把握と意識喚起をしてきた。

それに対して，「ない」と回答した人数は，1年生が1428名，2～4年生が2383名であった。本調査では大学生活において「体罰」を行ったことが「ある」と回答した学生は，ほとんどいなかった。このことは，本学が進めている体罰排除教育の効果であると考えられる。

【質問8】あなたは「体罰」についてどのように考えていますか。

①容認している

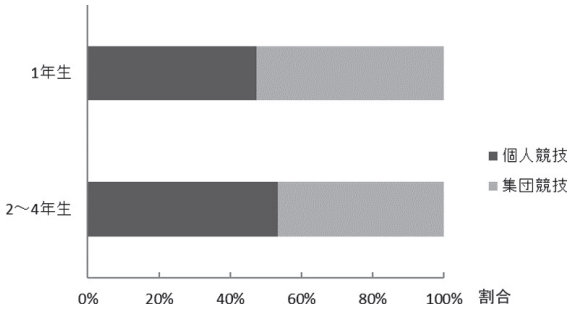

図34　質問8－①

クロス集計の結果，1年生は150名，2～4年生は174名の回答があった。「1年生／個人」は，47.23（71名），「1年生／集団」は，52.67%（79名），「2～4年生／個人」は，54.45%（93名），「2～4年生／集団」は，46.55%（81名）の回答数だった。χ^2検定の結果，有意な差は認められなかった。

【質問 8】あなたは「体罰」についてどのように考えていますか。
②どちらかというと容認している

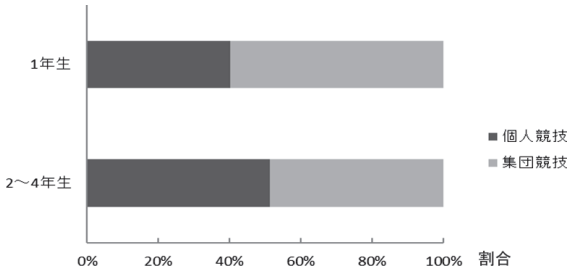

図 35　質問 8－②

クロス集計の結果，1 年生は 224 名，2 ～ 4 年生は 232 名の回答があった。「1 年生／個人」は，40.18％（90 名），「1 年生／集団」は，59.82％（134 名），「2 ～ 4 年生／個人」は，51.29％（119 名），「2 ～ 4 年生／集団」は，48.71％（113 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意差が認められた（$\chi^2(1, N=456)=5.67, p<.05$）。

【質問 8】あなたは「体罰」についてどのように考えていますか。
③どちらかというと容認していない

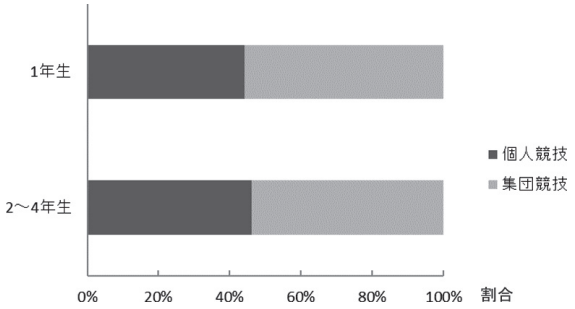

図 36　質問 8－③

クロス集計の結果，1 年生は 317 名，2 ～ 4 年生は 398 名の回答があった。「1 年生／個人」は，19.58％（140 名），「1 年生／集団」は，24.76％（177 名），「2 ～ 4 年生／個人」は，25.73％（184 名），「2 ～ 4 年生／集団」は，29.93％（214 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意な差は認められなかった。

【質問 8】あなたは「体罰」についてどのように考えていますか。
④容認していない

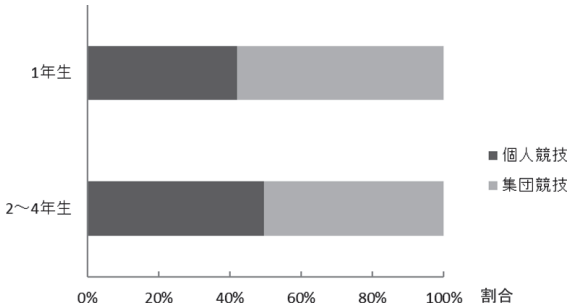

図 37　質問 8－④

クロス集計の結果，1 年生は 708 名，2 ～ 4 年生は 1553 名の回答があった。「1 年生／個人」は，41.95％（297 名），「1 年生／集団」は，58.05（411 名），「2 ～ 4 年生／個人」は，33.97％（765 名），「2 ～ 4 年生／集団」は，34.72％（785 名）で，χ^2 検定の結果，有意差が認められた（$\chi^2=10.99$, df=1, $p<.05$）。

【質問 8】の考察

「体罰についてどのように考えているか」という質問に回答した者の中で，「容認している」「どちらかというと容認している」，「どちらかというと容認していない」，「容認していない」という回答について，集計したところ，「どちらかというと容認している」と「容認していない」という質問に有意な差が認められた。「どちらかというと容認している」に回答した人数に関しては，縦断的なデータではないため直接的に比較はできないものの，体罰をどちらかというと容認していると回答した割合については，高校生活の集団競技に比して，大学生活の集団競技のほうが少なくなっていた。

「容認している」と「どちらかというと容認している」に回答した人数に関してまとめてみると，1 年生は 1450 名中 375 名（25.86％），それに対して 2 ～ 4 年生は 2415 名中 406 名（16.81％）であった。このことは，体罰を受けた者は体罰を肯定する傾向があるとする報告[19] とは軌を一にするとは言えず，本学が進めている体罰排除教育の成果であると考えられる。

分析２　学年とクラブの所属状況

【質問 3】あなたは，普段の（高校・大学）生活やクラブ活動等で，他者から体罰を受けたことがありましたか。あるいは見聞きしたことがありましたか。

①自分が体罰を受けたことがあった

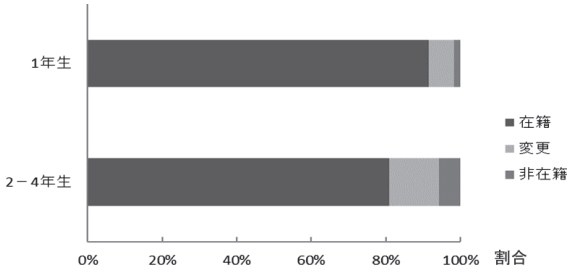

図 38　質問 3－①

クロス集計の結果，1 年生は 59 名，2 ～ 4 年生は 120 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，91.53％（54 名），「1 年生／変更」は，13.33％（4 名），「1 年生／非在籍」は 1.69％（1 名）の回答数であった。「2 ～ 4 年生／在籍」は，80.83％（97 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，13.33％（16 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，5.83％（7 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意な差が認められなかった。

【質問 3】あなたは，普段の（高校・大学）生活やクラブ活動等で，他者から体罰を受けたことがありましたか。あるいは見聞きしたことがありましたか。

②他者が体罰を受けているところをみたことがあった

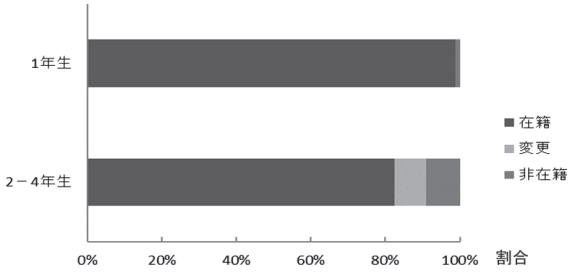

図 39　質問 3－②

クロス集計の結果，1 年生は 90 名，2 ～ 4 年生 143 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，98.89％（89 名），「1 年生／変更」は，0.0％（0 名），「1 年生／非在籍」は，1.11％（1 名）の回答数であった。「2 ～ 4 年生／在籍」は，82.52％（118 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，8.39％（12 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，9.09％（13 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意な差が認められた（$\chi^2(2, N=233)=15.07, p<.001$）。標準化残差分析を求めたところ，期待値との間に有意な差が認められなかった。

【質問 3】あなたは，普段の（高校・大学）生活やクラブ活動等で，他者から体罰を受けたことがありましたか。あるいは見聞きしたことがありましたか。

③実際に見たことはないが，体罰があるという噂を聞いたことがあった

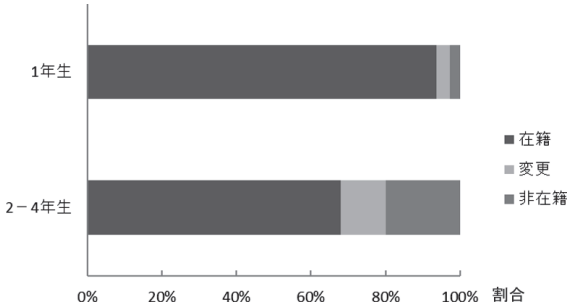

図 40　質問 3－③

クロス集計の結果，1 年生は 110 名，2 ～ 4 年生は 405 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，93.64％（103 名），「1 年生／変更」は，3.64％（4 名），「1 年生／非在籍」は，2.73％（3 名）の回答数であった。「2 ～ 4 年生／在籍」は，67.9％（275 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，12.1％（49 名），「2～4 年生／非在籍」は，20.0％（81 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意な差が認められた（$\chi^2(2, N=515)=29.65, p<.001$）。標準化残差分析を求めたところ，1 年生の回答数は，所属が期待値よりも有意に多く，変更と非所属は期待値よりも有意に少なかった（$p<.05, p<.05, p<.05$）。

【質問 3】あなたは，普段の（高校・大学）生活やクラブ活動等で，他者から体罰を受けたことがありましたか。あるいは見聞きしたことがありましたか。

④体罰を受けたことも，見たことも，噂に聞いたこともなかった

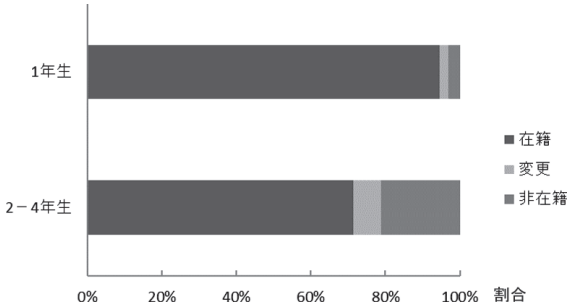

図 41　質問 3－④

クロス集計の結果，1 年生は 1272 名，2 ～ 4 年生は 2699 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，94.65％（1204 名），「1 年生／変更」は，2.28％（29 名），「1 年生／非在籍」は，3.07％（39 名）の回答数であった。

「2 ～ 4 年生／在籍」は，71.32％（1925 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，7.52％（203 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，21.16％（571 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意な差が認められた（$\chi^2(2,\ N=3971)=284.56$, $p<.001$）。標準化残差分析を求めたところ，1 年生の回答数は，所属が期待値よりも有意に多く，変更と非所属は期待値よりも有意に少なかった（$p<.05$, $p<.05$, $p<.05$）。2 ～ 4 年生においては，所属が期待値よりも有意に少なく，変更と非所属は期待値よりも有意に多かった（$p<.05$, $p<.05$, $p<.05$）。

【質問 3】の考察

体罰の噂を聞いたことがあると回答した学生においては，「1 年生／在籍」の回答人数が期待値より有意に多かった。また，「1 年生／変更」，「1 年生／非在籍」の回答人数が期待値より有意に低かった。高校は在籍人数や練習施設において，大学よりも少ないことが考えられる。藤田ら（2014）[1] は，高校生活における体罰の多くは，学校運動部活動における指導者によって引き起こされるものであると報告している。そのため，大学よりも狭い環境下の高校でクラブに所属していた学生は，体罰の噂を聞きやすいのではないかと考えられる。一方，クラブに所属していない学生や途中で変更があった学生は，クラブに所属していた学生と比べると体罰の噂を耳にするのが少ないのではないかと示唆される。

一方，「体罰の経験，目撃，伝聞，すべてに経験がない」と回答した学生においては，「1 年生／在籍」，「2 ～ 4 年生／変更」，「2 ～ 4 年生／非在籍」の回答人数が期待値より有意に多かった。これは，体罰の問題が広がったことや本学が推進している体罰排除教育の成果により，体罰の経験，目撃，伝聞がなかったと答えた人が増えたのではないかと考えられる。

しかし，「2 ～ 4 年生／在籍」，「1 年生／変更」，「1 年生／非在籍」の回答人数が期待値より有意に低かったことは，未だ体罰が確実になくなっていないことによるものと考えられる。

【質問 4】（1）それは，どのような行為でしたか。
①殴る，蹴る，物で叩く等の暴力

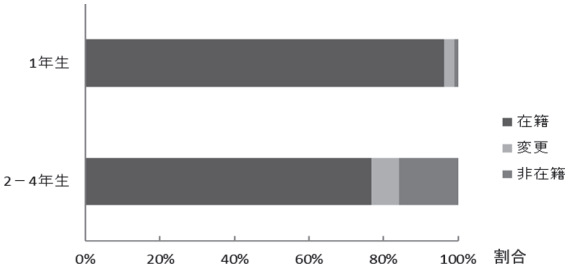

図 42　質問 4（1）－①

クロス集計の結果，1 年生は 184 名，2 ～ 4 年生は 453 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，96.2％（177 名），「1 年生／変更」は，2.72％（5 名），「1 年生／非在籍」は 1.09％（2 名）の回答数であった。「2 ～ 4 年生／在籍」は，76.82％（348 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，7.28％（33 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，15.89％（72 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意な差が認められた（$\chi^2(2,\ N=637)=35.23$, $p<.001$）。標準化残差分析を求めたところ，1 年生の回答数は，所属が期待値よりも有意に多く，非所属が期待値よりも有意に少なかった（$p<.05$, $p<.05$）。2 ～ 4 年生においては，非所属が期待値よりも少なかった（$p<.05$）。

【質問 4】（1）それは，どのような行為でしたか。
②人格を否定するような暴言

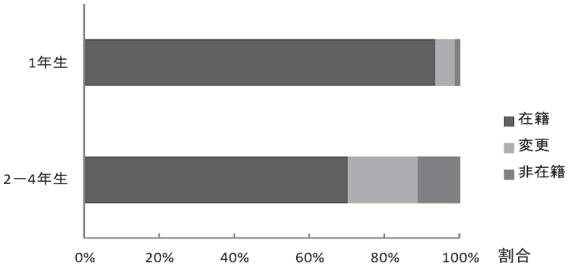

図 43　質問 4（1）－②

クロス集計の結果，1 年生は 76 名，2 ～ 4 年生は 214 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，93.42％（71 名），「1 年生／変更」は，5.26％（4 名），「1 年生／非在籍」は，1.32％（1 名）の回答数であった。「2 ～ 4 年生／在籍」は，70.09％（150 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，18.69％（40 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，11.21％（24 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意な差が認められた（$\chi^2(2,\ N=290)=17.05$, $p<.001$）。標準化残差分析を求めたところ，1 年生の回答数は，変更と非所属が期待値よりも有意に少なかった（$p<.05$）。

【質問 4】(1) それは，どのような行為でしたか。
③教師あるいは指導者の立場を利用した威圧や脅し

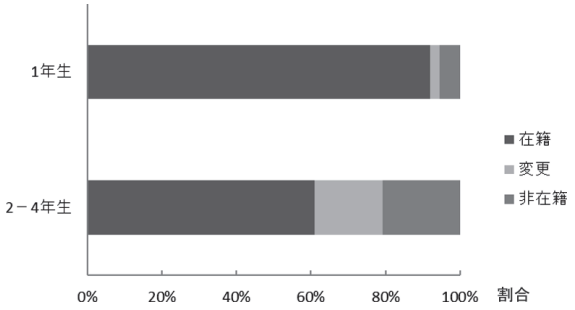

図 44　質問 4（1）－③

クロス集計の結果，1 年生は 37 名，2 ～ 4 年生は 92 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，91.89％（34 名），「1 年生／変更」は，2.7％（1 名），「1 年生／非在籍」は，5.41％（2 名）の回答数であった。「2 ～ 4 年生／在籍」は，60.87％（56 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，18.48％（17 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，20.65％（19 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意な差が認められた（$\chi^2(2, N=129)=12.11, p<.01$）。標準化残差分析を求めたところ，期待値との間に有意な差が認められなかった。

【質問 4】(1) の考察

「体罰を受けたことがある」,「体罰を見聞きしたことがある」という質問に回答した者の中で,「それは，どのような行為」だったかということで,「殴る，蹴る，物で叩く等の暴力」と回答した学生において,「1 年生／在籍」と,「2 ～ 4 年生／非在籍」の回答人数が期待値より有意に多かった。また「1 年生／非在籍」の回答人数が期待値より有意に低かった。大学生活においてクラブに所属していない学生が期待値よりも多かった理由として，阿江（1991）[20] が，体罰の継続がスポーツからのドロップアウトを予測できると述べている。このことから，高校生活において体罰を経験した学生は大学ではクラブに所属しない傾向にあるのではないかと推測される。

「人格を否定するような暴言」と回答した学生において,「1 年生／変更」と,「1 年生／非在籍」の回答人数が期待値より有意に低かった。これは高校生活において，多くの生徒がクラブ活動に参加している状況があるため，所属状況の変更があった学生やクラブに入っていなかった学生は，暴言による体罰経験や目撃，伝聞が期待値よりも少なかったのではないかと示唆される。

「教師あるいは指導者の立場を利用した威圧や脅し」と回答した学生において，高校生活と大学生活，クラブへの所属状況の違いにおける関連性がないことが明らかとなった。長谷川（2016）[12] は，部活動が学校教育のなかに置かれていながらも，正課外の活動であることで独特な閉鎖的な空間を作り出し，絶対的な服従関係のなかで「勝利」や「技術向上」といった誰もが肯定せざるをえない名分を課せられると述べている。このことから，教師や指導者の立場は，高校生活と大学生活，クラブの所属状況に違いがなかったことが示唆される。

【質問 4】(2) それは，いつのことでしたか。
①授業中

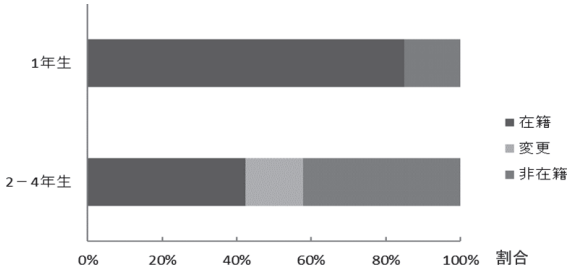

図 45　質問 4（2）－①

クロス集計の結果，1 年生は 20 名，2 ～ 4 年生は 26 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，85.0％（17 名），「1 年生／変更」は，0％（0 名），「1 年生／非在籍」は，15.0％（3 名），「2 ～ 4 年生／在籍」は，42.31％（11 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，15.38％（4 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，42.31％（11 名）の回答数であった。χ^2 検定を行った結果，1％水準で有意な差が認められた（$\chi^2(2, N=46)=9.23, p<.01$）。

【質問 4】(2) それは，いつのことでしたか。
②休み時間

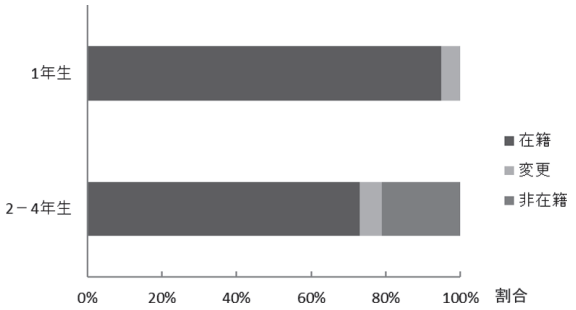

図 46　質問 4（2）－②

クロス集計の結果，1 年生は 20 名，2 ～ 4 年生は 67 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，95.0％（19 名），「1 年生／変更」は，5.0％（1 名），「1 年生／非在籍」は，0％（0 名），「2 ～ 4 年生／在籍」は，73.13％（49 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，5.97％（4 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，20.9％（14 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意な差が認められなかった。

【質問 4】(2) それは，いつのことでしたか。
③クラブ活動

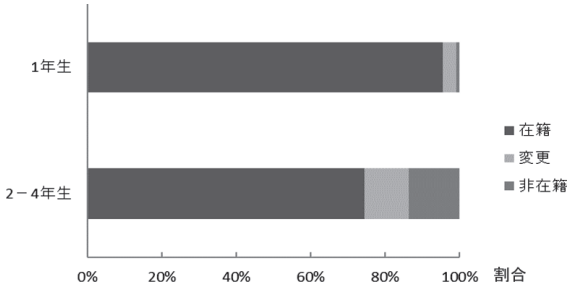

図 47　質問 4 (2) －③

クロス集計の結果，1 年生は 199 名，2 ～ 4 年生は 415 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，95.48％（190 名），「1 年生／変更」は，3.52％（7 名），「1 年生／非在籍」は，1.01％（2 名），「2 ～ 4 年生／在籍」は，74.46％（309 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，11.81％（49 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，13.73％（57 名）の回答数であった。χ^2 検定を行った結果，1％水準で有意な差が認められた（$\chi^2(2, N=614)=40.13, p<.01$）。

【質問 4】(2) の考察

「授業中」と「クラブ活動」について有意な差が認められたことに関して，「授業中」については，1 年生については，「在籍」の学生が体罰を経験したという回答が多かったのに対して，2 ～ 4 年生については，「変更」，「非在籍」で体罰を経験したと回答した人数が多かった。また，「クラブ活動」については，1 年生に比して，2 ～ 4 年生は，「変更」，「非在籍」の割合が増えていた。これらのことに関して，1 年生（高校生活）においては，クラブに「在籍」しているか否かという 2 分類において，体罰経験のあるなしが分かれるのではないかと考えられる。また 2 ～ 4 年生（大学生活）においては，「授業中」に体罰を経験したと回答している学生で，「変更」，「非在籍」の学生も体罰経験があると回答している。「クラブ活動」において体罰を経験したと回答している学生でも「変更」，「非在籍」の学生も体罰経験があると回答している。このことは，回答している学生全員ではないにしても，体罰経験があったことによって，「変更」や「非在籍」というカテゴリに分類されるように所属を移動したのではないかと考えられる。しかしながら，「変更」には，「途中でやめた」，「途中で転部した」，「途中で入った」という 3 群が混在しているため，一概に体罰経験によってということに言及することは危険であると考えられる。

【質問 4】(3) それは，誰からでしたか。
①担任の教師

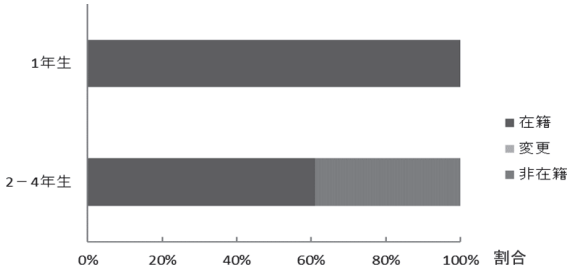

図 48　質問 4 (3) －①

クロス集計の結果，1 年生は 10 名，2 ～ 4 年生は 23 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，100％（10 名），「1 年生／変更」は，0％（0 名），「1 年生／非在籍」は，0％（0 名），「2 ～ 4 年生／在籍」は，60.87％（14 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，0％（0 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，39.13％（9 名）の回答数であった。χ^2 検定を行った結果，1％水準で有意な差が認められた（$\chi^2(2, N=33)=5.38, p<.05$）。調整済み残差を求めたところ，「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.05$）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（$p<.05$）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.05$）。

【質問 4】(3) それは，誰からでしたか。
②教科の教師

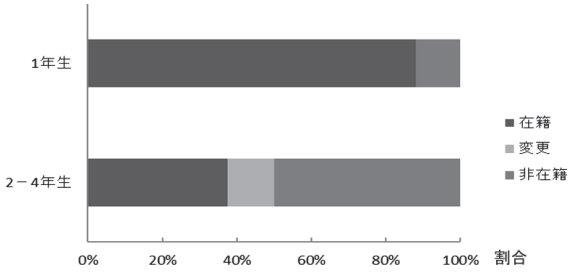

図 49　質問 4 (3) －②

クロス集計の結果，1 年生は 25 名，2 ～ 4 年生は 16 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，88.0％（22 名），「1 年生／変更」は，0％（0 名），「1 年生／非在籍」は，12.07％（3 名），「2 ～ 4 年生／在籍」は，37.5％（6 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，12.5％（2 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，50.0％（8 名）の回答数であった。χ^2 検定を行った結果，1％水準で有意な差が認められた（$\chi^2(2, N=41)=12.02, p<.01$）。標準化残差を求めたところ，「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.05$）。

【質問 4】(3) それは，誰からでしたか。
③クラブ活動の内部の指導者

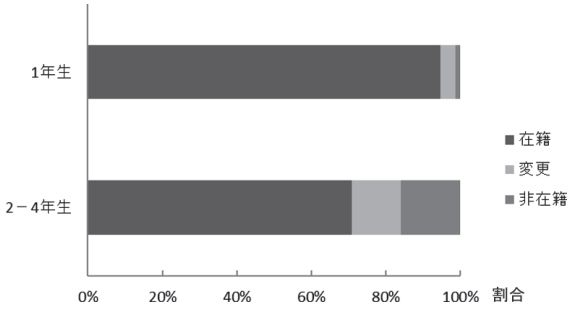

図 50　質問 4 (3) －③

クロス集計の結果，1 年生は 169 名，2 ～ 4 年生は 189 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，94.67%（160 名），「1 年生／変更」は，4.14%（7 名），「1 年生／非在籍」は，1.18%（2 名），「2 ～ 4 年生／在籍」は，70.9%（134 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，13.23%（25 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，15.87%（30 名）の回答数であった。回答した学生のうち χ^2 検定を行った結果，1%水準で有意な差が認められた（$\chi^2(2,\ N=358)=35.92$, $p<.01$）。標準化残差を求めたところ，「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「1 年生／変更」において回答数は，期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／変更」において回答数は，期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。「1 年生／非在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は，期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。

【質問 4】(3) それは，誰からでしたか。
④クラブ活動の外部の指導者

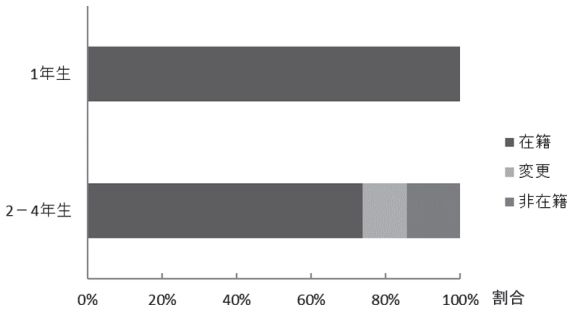

図 51　質問 4 (3) －④

クロス集計の結果，1 年生は 14 名，2 ～ 4 年生は 42 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，100%（14 名），「1 年生／変更」は，0%（0 名），「1 年生／非在籍」は，0%（0 名），「2 ～ 4 年生／在籍」は，73.81%（31 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，11.9%（5 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，14.29%（6 名）の回答数であった。χ^2 検定を行った結果，有意な差が認められなかった。

【質問 4】(3) それは，誰からでしたか。
⑤在校生

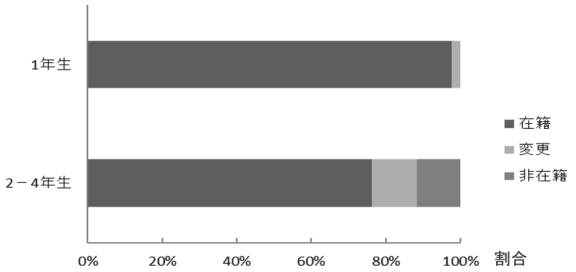

図 52　質問 4 (3) －⑤

クロス集計の結果，1 年生は 43 名，2 ～ 4 年生は 351 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，97.67%（42 名），「1 年生／変更」は，2.33%（1 名），「1 年生／非在籍」は，0%（0 名），「2 ～ 4 年生／在籍」は，76.35%（268 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，11.97%（42 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，11.68%（41 名）の回答数であった。回答した学生のうち χ^2 検定を行った結果，1%水準で有意な差が認められた（$\chi^2(2,\ N=394)=10.49$, $p<.01$）。大学生活でクラブに入っていた学生が有意に高い値を示した。標準化残差を求めたところ，「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「1 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に低かった（$p<.05$）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.05$）。

【質問 4】(3) の考察

1 年生（高校生活）においては，圧倒的に「在籍」と回答した学生が，「担任の教師」，「教科の教師」，「クラブ活動の内部の指導者」「クラブ活動の外部の指導者」，「在校生」からの体罰経験に多く回答していた。このことは，高等学校の運動部活動の勝利主義が部活動の過熱化を招き，閉鎖的空間における弱者への「暴力的行為」が増幅されているという今村・大塚（1996）[15] の報告を支持するものと考えらえる。

2 ～ 4 年生（大学生活）においては，「変更」，「非在籍」と回答した学生の体罰経験の回答も各々 10 数パーセント程度の回答があった。このことは，体罰経験があったことによって，「変更」や「非在籍」というカテゴリに分類されるように所属を移動したのではないかと考えられる。別の言い方をすれば，体罰経験を受けたことによる「変更」と「非在籍」は，学生自身のコーピングスタイルの一つであると考えられる。

【質問 4】(4) その頻度はどのくらいでしたか。
① 1 回のみ

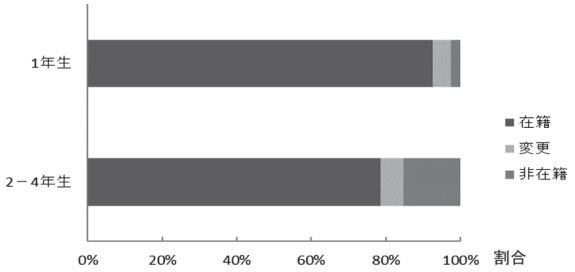

図 53　質問 4 (4) －①

クロス集計の結果,「① 1 回のみ」と回答した学生は 245 名であった。そのうち，高校は 81 名，2 ～ 4 年生は 164 名の回答があった。「1 年生／在籍」が 97.67％（75 名),「1 年生／変更」が 42.33％（4 名),「1 年生／非在籍」が 2.47（2 名）であった。「2 ～ 4 年生／在籍」が 78.66％（129 名），2 ～ 4 年生／変更」が 6.1％（10 名),「2 ～ 4 年生／非在籍」が 15.24％（25 名）であった。この回答について，高校と大学，クラブへ所属していると入学後変更, 所属していないを基準に χ^2 検定を行ったところ，有意な差が認めらた（$\chi^2(2, N=245)=9.42, p<.01$）。標準化残差を求めたところ,「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は, 期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「1 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。

【質問 4】(4) その頻度はどのくらいでしたか。
②複数回

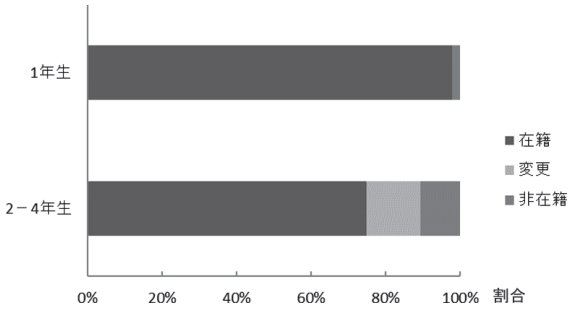

図 54　質問 4 (4) －②

クロス集計の結果,「②複数回」と回答した学生は 297 名であった。そのうち，1 年生は 90 名，2 ～ 4 年生は 207 名の回答があった。「1 年生／在籍」が 97.78％（88 名),「1 年生／変更」は，0％（0 名),「1 年生／非在籍」が 2.22％（2 名）であった。また,「2 ～ 4 年生／在籍」が 74.88％（155 名),「2 ～ 4 年生／変更」が 14.49％（30 名),「2 ～ 4 年生／非在籍」が 10.63％（22 名）であった。この回答について，χ^2 検定を行ったところ，回答人数比率に有意な差が認められた（$\chi^2(2, N=297)=22.55, p<.001$）。標準化残差を求めたところ,「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「1 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に低かった（$p<.05$）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.05$）。

【質問 4】(4) その頻度はどのくらいでしたか。
③日常的に

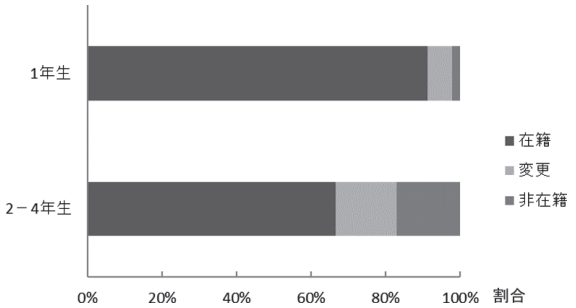

図 55　質問 4 (4) －③

クロス集計の結果,「③日常的に」と回答した学生は 163 名であった。そのうち，1 年生は 46 名，2 ～ 4 年生は 117 名の回答があった。「1 年生／在籍」が 91.3％（42 名),「1 年生／変更」が 6.52％（3 名),「1 年生／非在籍」が 2.17％（1 名）であった。また,「2 ～ 4 年生／在籍」が 66.67％（78 名),「2 ～ 4 年生／変更」が 16.24％（19 名),「2 ～ 4 年生／非在籍」が 17.09％（20 名）であった。この回答について，χ^2 検定を行ったところ，有意な差が認められた（χ^2 $(2, N=163)=10.74, p<.01$）。標準化残差を求めたところ,「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「1 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に低かった（$p<.05$）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.05$）。

【質問 4】(4) の考察

1 年生（高校生活）においては,「在籍」と回答した学生が,「1 回のみ」,「複数回」,「日常的に」の体罰経験に多く回答していた。このことについて，藤田・蛯原（2014）[21] の報告によると, 体罰を経験した者にとって，指導者は，失敗すれば罰を与え，能力の高い生徒のみを大切に扱い，生徒間の競争をあおる人物であったとしているが，今回の調査に関しては，そこまで詳しく聞き取りを行っているものではなく，あくまでも

クラブに在籍していた学生に体罰経験者が多く存在したという事実のみを踏まえ，さらに検討を要すことが必要であると考えられる。また，高等学校の運動部活動の勝利主義が部活動の過熱化を招き，閉鎖的空間における弱者への「暴力的行為」が増幅されているという今村・大塚（1996）[15] の報告を支持するものと考えらえる。

2 ～ 4 年生（大学生活）においては，「変更」，「非在籍」と回答した学生の体罰経験の回答は数パーセント～ 10 数パーセント程度の回答があった。このことは，体罰経験があったことによって，「変更」や「非在籍」に所属を変えたのではないかと考えられる。換言すれば，体罰経験による所属の変更は，学生自身のコーピングスタイルの一つであるといえるのではないかと考えられる。

【質問 4】(5) それは，どの程度のものでしたか。
①肉体的な苦痛を伴ったが，治療するまでのものではなかった

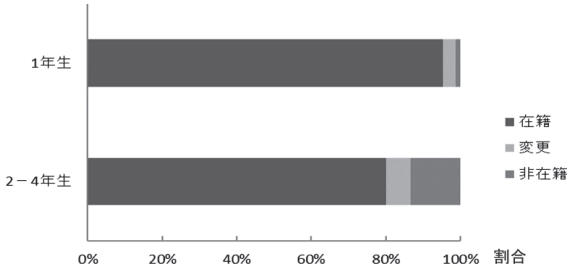

図 56　質問 4（5）－①

クロス集計の結果，「①肉体的な苦痛を伴ったが，治療するまでのものではなかった」と回答した学生は 434 名であった。そのうち，1 年生は 148 名，2 ～ 4 年生は 286 名の回答があった。「1 年生／在籍」が 95.27％（141 名），「1 年生／変更」が 3.38％（5 名），「1 年生／非在籍」が 1.35％（2 名）であった。また，「2 ～ 4 年生／在籍」が 80.07％（229 名），「2 ～ 4 年生／変更」が 6.64％（19 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」が 13.29％（38 名）であった。この回答について，χ^2 検定を行ったところ，有意な差が認められた（$\chi^2(2, N=434)=19.60$, $p<.001$）。標準化残差を求めたところ，「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「1 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。

【質問 4】(5) それは，どの程度のものでしたか。
②肉体的な苦痛を伴い，治療を必要とするものだった

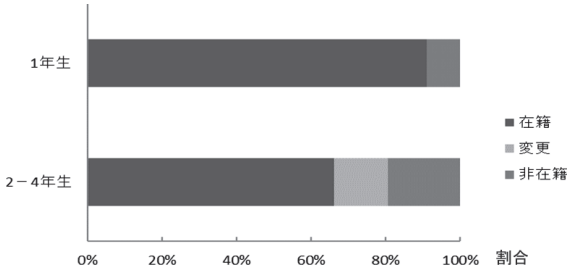

図 57　質問 4（5）－②

クロス集計の結果，「②肉体的な苦痛を伴い，治療を必要とするものだった」と回答した学生は 73 名であった。そのうち，1 年生は 11 名，2 ～ 4 年生は 62 名の回答があった。「1 年生／在籍」が 90.91％（10 名），「1 年生／変更」は，0％（0 名），「1 年生／非在籍」が 9.09％（1 名）であった。また，「2 ～ 4 年生／在籍」が 66.13％（41 名），「2 ～ 4 年生／変更」が 14.52％（9 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」が 19.35％（12 名）であった。この回答について χ^2 検定を行ったところ，回答人数比率に有意な差は認められなかった。

【質問 4】(5) それは，どの程度のものでしたか。
③精神的な苦痛をともなうものであった

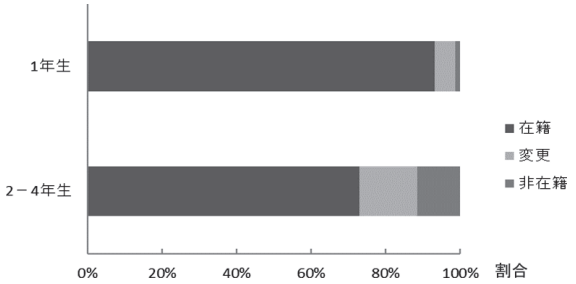

図 58　質問 4（5）－③

クロス集計の結果，「③精神的な苦痛をともなうものであった」と回答した学生は 299 名であった。そのうち，1 年生は 74 名，2 ～ 4 年生は 225 名の回答があった。「1 年生／在籍」が 93.24％（69 名），「1 年生／変更」が 5.41％（4 名），「1 年生／非在籍」が 1.35％（1 名）であった。また，「2 ～ 4 年生／在籍」が 72.89％（164 名），「2 ～ 4 年生／変更」が 15.56％（35 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」が 11.56％（26 名）であった。この回答について，χ^2 検定を行ったところ，有意な差が認められた（$\chi^2(2, N=299)=13.78$, $p<.01$）。標準化残差を求めたところ，「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「1 年生／変更」において回答数は期待よりも

有意に低かった（p<.05）。「2 ～ 4 年生／変更」において回答数は期待よりも有意に高かった（p<.05）。「1 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に低かった（p<.01）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（p<.01）。

【質問 4】（5）の考察

「肉体的な苦痛を伴ったが，治療するまでのものではなかった」と「精神的な苦痛を伴うものであった」の質問の回答に有意な差が認められた。このことは，1 年生（高校生活）のほうが 2 ～ 4 年生（大学生活）よりもクラブに在籍している学生の回答が多かったことによるものと考えらえる。この結果は，今村・大塚（1996）[13]の勝利主義が部活動の過激化を招くことによると報告していることを支持していると考えられる。

2 ～ 4 年生（大学生活）においては，「変更」，「非在籍」の回答も 1 年生よりは多くなっていた。このことは，大学生活のほうが高校生活よりも比較的自由度が高く，クラブ活動でも移動がおこないやすい環境にあったのではないかと考えられる。

【質問 4】（6）それを行った理由をどのように説明されましたか。

①授業中の態度が悪い

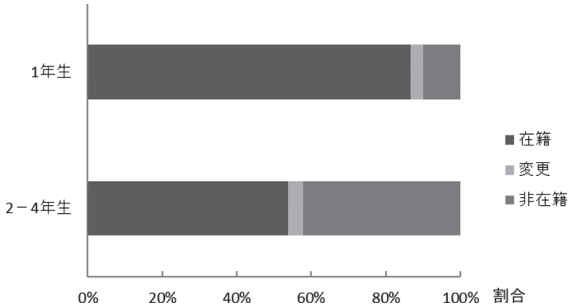

図 59　質問 4（6）－①

質問 4（6）の「①授業中の態度が悪い」において，56 名の回答が得られた。「1 年生／在籍」は 86.67%（26 名），「1 年生／変更」は 3.33（1 名），「1 年生／非在籍」は 10.0%（3 名），「2 ～ 4 年生／在籍」は 53.85%（14 名），「2 ～ 4 年生／変更」は 3.85%（1 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は 42.31%（11 名）であった。そこで，χ^2 検定を行った結果，有意な差が認められた（$\chi^2(2)=7.93$ p<.05）。標準化残差を求めたところ，「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（p<.01）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（p<.01）。「1 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に低かった（p<.01）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（p<.01）。

【質問 4】（6）それを行った理由をどのように説明されましたか。

②休み時間中の態度が悪い

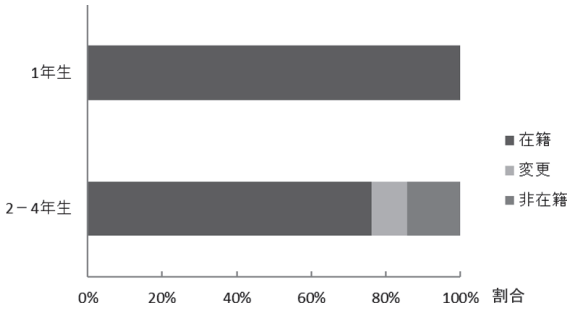

図 60　質問 4（6）－②

質問 4（6）の「②休み時間中の態度が悪い」において，25 名の回答が得られた。「1 年生／在籍」は 100%（4 名），「1 年生／変更」は 0 名（0%），「1 年生／非在籍」は 0 名（0%），「2 ～ 4 年生／在籍」は 76.19（16 名），「2 ～ 4 年生／変更」は 9.52%（2 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は 14.29（3 名）であった。そこで，χ^2 検定を行った結果，有意な差は認められなかった。

【質問 4】（6）それを行った理由をどのように説明されましたか。

③クラブ活動中の態度が悪い

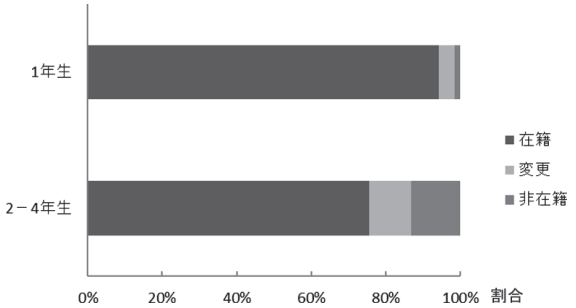

図 61　質問 4（6）－③

質問 4（6）の「③クラブ活動中の態度が悪い」において，478 名の回答が得られた。「1 年生／在籍」は 94.37%（134 名），「1 年生／変更」は 4.23%（6 名），「1 年生／非在籍」は 1.41%（2 名），「2 ～ 4 年生／在籍」は 75.6%（254 名），「2 ～ 4 年生／変更」は 11.31%（38 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は 13.1%（44 名）であった。そこで，χ^2 検定を行った結果，有意な差は認められた（$\chi^2(2, N=478)=23.94$, p<.001）。標準化残差を求めたところ，「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（p<.01）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（p<.01）。「1 年生／変更」において回答数は，期待よりも有意に低かった（p<.05）。「2 ～ 4 年生／変更」において回答数は，期待よりも有意に高かった（p<.05）。「1

年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に低かった（p<.01）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（p<.01）。

【質問 4】（6）の考察

「授業中の態度が悪い」と「クラブ活動中の態度が悪い」に関して，有意な差が認められた。「授業中の態度が悪い」ということについて，1 年生よりも 2 ～ 4 年生の「非在籍」と回答した学生の割合が多くなっていた。このことに関しては，必ずしもそうとは言い切れないが，高校と大学での授業形態の違いによるものではないかと考えられる。文部科学省（2013）[17] は，「体罰根絶に向けた取組の徹底について（通知）」において，「部活動指導における体罰の防止のための取組」を掲げている。これによると，「中学校及び高等学校では「部活動」において最も多くの体罰が報告されていること等に鑑み，部活動における体罰の防止について特に留意する必要があること。」が述べられている。また，「教育委員会及び学校は，平成 25 年 5 月 27 日に取りまとめられた「運動部活動の在り方に関する調査研究報告書」に掲げる「運動部活動での指導のガイドライン」の趣旨，内容を理解の上，運動部活動の指導者（顧問の教員，外部指導者）による体罰等の根絶及び適切かつ効果的な指導に向けた取組を実施すること。」とも述べられている。すなわち，部活動中において，体罰などが多発していることは既に周知の事実であり，本調査でも同様の結果が得られていると考えられる。

【質問 4】（7）それを受けたり，見たりしたとき，どのように対処されましたか。

①他の教員や指導者に相談して解決を図った

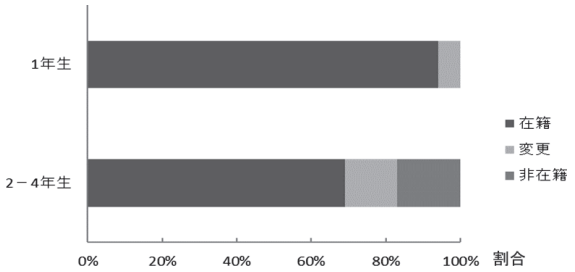

図 62　質問 4（7）－①

質問 4（7）の「①他の教員や指導者に相談して解決を図った」において，105 名の回答があった。「1 年生／在籍」が 94.12％（32 名），「1 年生／変更」が 5.88％（2 名），「1 年生／非在籍」が 0 名（0％）であった。また，「2 ～ 4 年生／在籍」が 69.01％（49 名），「2 ～ 4 年生／変更」が 14.08％（10 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」が 16.9％（12 名）であった。そこで，χ^2 検定を行った結果，有意な差が認められた（$\chi^2(2, N=105)=8.98$, p<.05）。標準化残差を求めたところ，「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（p<.01）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（p<.01）。「1 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に低かった（p<.05）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（p<.05）。

【質問 4】（7）それを受けたり，見たりしたとき，どのように対処されましたか。

②誰にも相談することができずに，一人で悩んだ

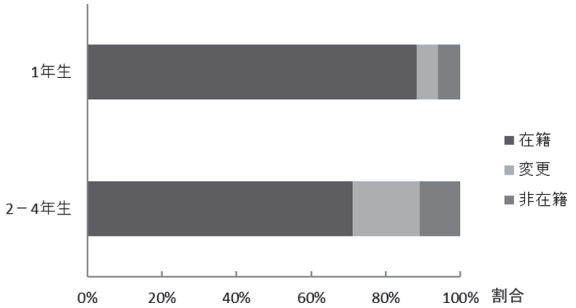

図 63　質問 4（7）－②

質問 4（7）の「②誰にも相談することができず，一人で悩んだ」において，100 名の回答があった。「1 年生／在籍」が 88.24％（15 名），「1 年生／変更」が 5.88％（1 名），「1 年生／非在籍」が 5.88％（1 名）であった。また，「2 ～ 4 年生／在籍」が 71.08％（59 名），「2 ～ 4 年生／変更」が 18.07％（15 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」が 10.84％（9 名）であった。そこで，χ^2 検定を行った結果，有意な差は認められなかった。

【質問 4】（7）それを受けたり，見たりしたとき，どのように対処されましたか。

③特に気にとめることもなかった

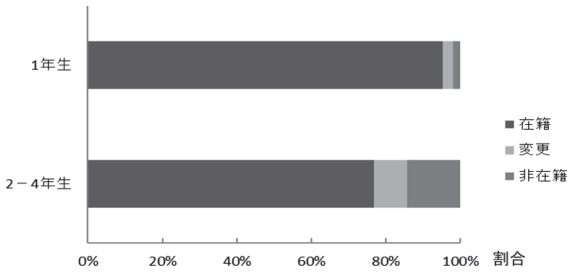

図 64　質問 4（7）－③

質問 4（7）の「③特に気にとめることもなかった」において，427 名の回答があった。「1 年生／在籍」が 95.39％（145 名），「1 年生／変更」が 2.63％（4 名），「1 年生／非在籍」が 1.97％（3 名）であった。また，「2 ～ 4 年生／在籍」が 76.73％（211 名），「2 ～ 4 年生／変更」が 9.09％（25 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」が

14.18％（39 名）であった。そこで，χ^2 検定を行った結果，有意な差が認められた（$\chi^2(2, N=427)=24.93, p<.001$）。標準化残差を求めたところ，「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「1 年生／変更」において回答数は，期待よりも有意に低かった（$p<.05$）。「2 ～ 4 年生／変更」において回答数は，期待よりも有意に高かった（$p<.05$）。「1 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。

【質問 4】（7）の考察

「他の教員や指導者に相談して解決を図った」と「特に気にとめることもなかった」という質問について，有意な差が認められた。

「他の教員や指導者に相談して解決を図った」という質問については，1 年生よりも 2 ～ 4 年生の「変更」と「非在籍」の回答割合が多かった。このことは，高校よりも大学のほうが比較的容易にクラブ活動を移動できるためではないかと考えられる。しかし，「特に気にとめることもなかった」と回答している学生が 427 名であった。その理由としては，体罰についての知識と理解や，対処法という情報量の不足が原因として考えられる。文部科学省（2013）[17] は，「体罰根絶に向けた取組の徹底について（通知）」で，「報告及び相談の徹底」を掲げている。これによると，「学校の管理職は，教員が体罰や体罰と疑われる行為（以下「体罰等」という。）を行った場合に，教員が管理職等へ直ちに報告や相談を行う環境を整備すること。」と述べられている。しかしながら，生徒及び学生側の体罰における対応については述べられていない。そこでし，このことを本学の体罰排除教育において補っていると推察されるため，今回の調査結果になったと考えられる。

【質問 4】（8）それについて，今後どのような対応を考えていますか。

①原因になるようなことをしないように努めたい

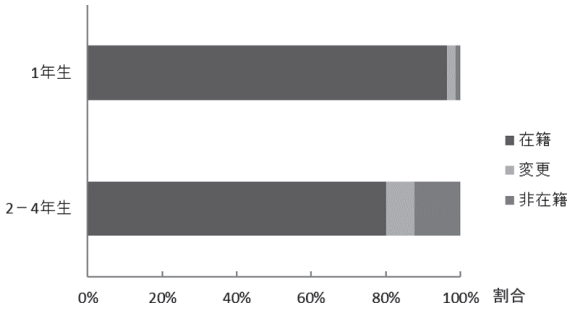

図 65　質問 4（8）－①

クロス集計の結果，1 年生は 85 名，2 ～ 4 年生は 171 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，96.47％（82 名），「1 年生／変更」は，2.35％（2 名），「1 年生／非在籍」は，1.18％（1 名），「2 ～ 4 年生／在籍」は，80.12％（137 名），「2 ～ 4 年生／変更」は 7.6％（13 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は 12.28％（21 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意差が認められた（$\chi^2(2, N=256)=12.59, p<.01$）。標準化残差を求めたところ，「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「1 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。

【質問 4】（8）それについて，今後どのような対応を考えていますか。

②他の教員や指導者に相談したい

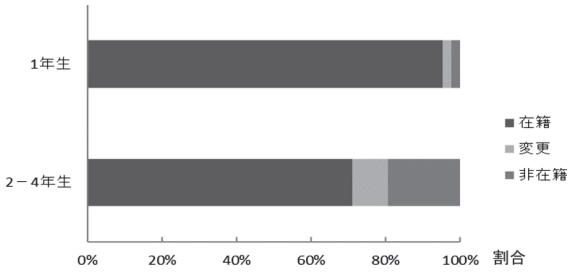

図 66　質問 4（8）－②

クロス集計の結果，1 年生は 42 名，2 ～ 4 年生は 62 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，95.24％（40 名），「1 年生／変更」は，2.38％（1 名），「1 年生／非在籍」は，2.38％（1 名），「2 ～ 4 年生／在籍」は，70.97％（44 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，9.68％（6 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，19.35％（12 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意差が認められた（$\chi^2(2, N=104)=9.58, p<.05$）。標準化残差を求めたところ，「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「1 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に低かった（$p<.05$）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.05$）。

【質問 4】(8) それについて，今後どのような対応を考えていますか。

③第三者機関や通報窓口等があれば相談したい

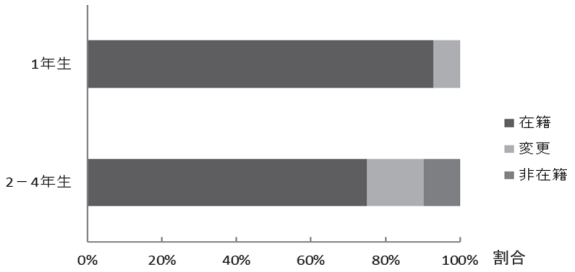

図 67　質問 4 (8) －③

クロス集計の結果，1 年生は 14 名，2 ～ 4 年生は 92 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，92.86％（13 名），「1 年生／変更」は，7.14％（1 名），「1 年生／非在籍」は，0％（0 名），「2 ～ 4 年生／在籍」は，75.0％（69 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，15.22％（14 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，9.78％（9 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意な差は認められなかった。

【質問 4】(8) それについて，今後どのような対応を考えていますか。

④特に考えていない

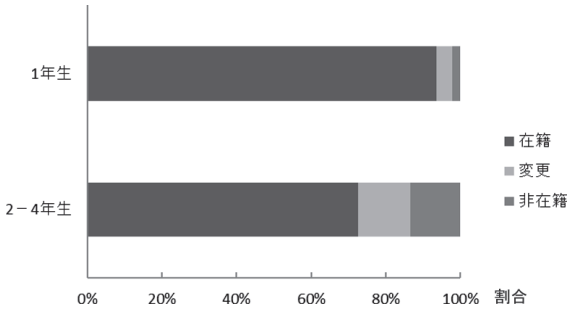

図 68　質問 4 (8) －④

クロス集計の結果，1 年生は 95 名，2 ～ 4 年生は 223 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，93.68％（89 名），「1 年生／変更」は，4.21％（4 名），「1 年生／非在籍」は，2.11％（2 名），「2 ～ 4 年生／在籍」は，72.65％（162 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，13.9％（31 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，13.45％（30 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意差が認められた（$\chi^2(2, N=318)=17.95, p<.01$）。標準化残差を求めたところ，「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「1 年生／変更」において回答数は，期待よりも有意に低かった（$p<.05$）。「2 ～ 4 年生／変更」において回答数は，期待よりも有意に高かった（$p<.05$）。「1 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。

【質問 4】(8) の考察

「原因になるようなことをしないように努めたい」と「第三者機関や通報窓口等があれば相談したい」という質問に関して有意な差が認められた。

「原因になるようなことをしないように努めたい」と回答した高校・大学の学生の「在籍」，「変更」，「非在籍」について，在籍に回答した学生の割合が多いのは容易に想像ができるものの，2 ～ 4 年生の「変更」，「非在籍」の回答の割合が多くなっていることについては，学生自らの体罰経験によるコーピングスタイルの表れによるものと考えられる。

「特に考えていない」と回答した学生は，どのように対応すればいいのかがわからないため，また被体罰に慣れてしまったためではないかと考えられる。

1 年生（高校生活）において，「変更」，「非在籍」が少なかったことの理由として，青木（1989）[7] は，わが国の運動部退部の理由は自分の意志が弱いというような内罰的理由が多いといわれていると報告している。今回の結果による，1 年生の「変更」，「非在籍」の割合が少ないということは，青木の報告を必ずしも支持することとは即断できないものの，可能性は否定できないと考えられる。

【質問 5】あなたは，高校生活で体罰を行ったことがありますか。

①ある

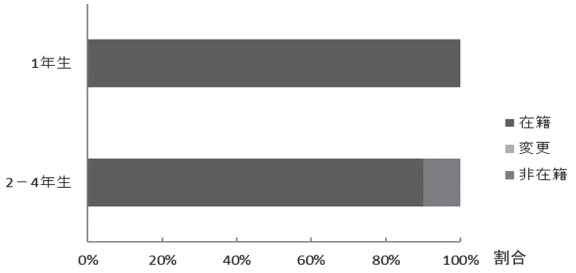

図 69　質問 5 －①

クロス集計の結果，1 年生は 6 名，2 ～ 4 年生は 10 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，100％（6 名），「1 年生／変更」と「1 年生／非在籍」は 0％（0 名），「2 ～ 4 年生／在籍」は，90.0％（9 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，10.0％（1 名）で，「2 ～ 4 年生／非在籍」は 0％（0 名）。χ^2 検定の結果，有意な差は認められなかった。

【質問 5】あなたは，高校生活で体罰を行ったことがありますか。

②ない

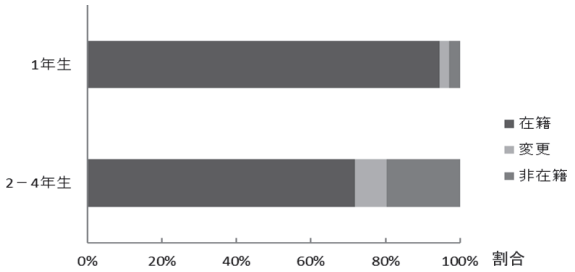

図 70　質問 5－②

クロス集計の結果，1 年生は 1509 名，2 ～ 4 年生は 3314 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，94.63％（1428 名），「1 年生／変更」は，2.45％（37 名），「1 年生／非在籍」は，2.92％（44 名），「2 ～ 4 年生／在籍」は，71.91％（2383 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，8.33％（276 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，19.76％（655 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意差が認められた（$\chi^2(2, N=4823)=326.03, p<.01$）。標準化残差を求めたところ，「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「1 年生／変更」において回答数は，期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／変更」において回答数は，期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。「1 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。

【質問 5】の考察

体罰を受けた者は体罰を肯定する傾向（楠本ら，1998）[15] があり，体罰経験があると体罰を行う可能性がある（兄井・永里・竹内・長嶺・須崎，2014）[22] と指摘されているように，大学では今まで「体罰」を受けた経験があるとすれば，クラブに属していないほうが「体罰」を行う可能性は低くなると考えられる。大学生活において入学後に「体罰」を行ったことが「ある」と回答した学生は，クラブに在籍するものが多く，今だ「0 ＝根絶」には至っていない。

しかしながら，高校生のときに体罰を経験した学生が大学生となり，体罰を行ったことが「ない」と回答した人数は，3314 名に上っている。もし，楠本ら，兄井らの報告の通りであれば，体罰を行ったことが「ない」と回答する人数は，もっと少なくなっていることであろう。このことは，「体罰経験があると体罰を行う可能性がある」とする考えかたと軌を一にするとは言い難く，本学の体罰排除教育の成果であると考えられる。

【質問 8】あなたは「体罰」についてどのように考えていますか。

①容認している

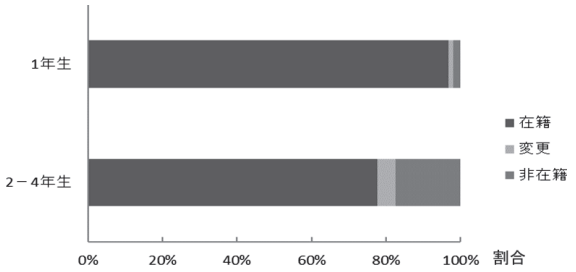

図 71　質問 8－①

クロス集計の結果，1 年生は 155 名，2 ～ 4 年生は 224 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，96.77％（150 名），「1 年生／変更」は，1.29％（2 名），「1 年生／非在籍」は 1.94％（3 名），「2 ～ 4 年生／在籍」は，77.68％（174 名），「2 ～ 4 年生／クラス 2」は，4.91％（11 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，17.41％（39 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意差が認められた（$\chi^2(2, N=379)=27.21, p<.01$）。標準化残差を求めたところ，「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「1 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に低かった（$p<.01$）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（$p<.01$）。

【質問 8】あなたは「体罰」についてどのように考えていますか。

②どちらかというと容認している

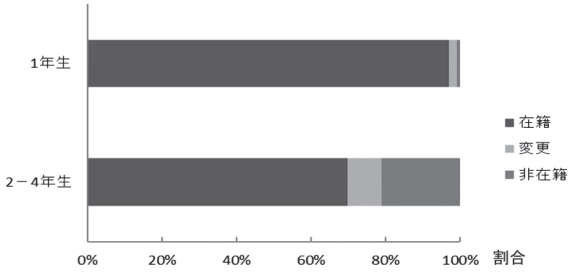

図 72　質問 8－②

クロス集計の結果，1 年生は 231 名，2 ～ 4 年生は 333 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，96.97％（224 名），「1 年生／変更」は，2.16％（5 名），「1 年生／非在籍」は，0.87％（2 名），「2 ～ 4 年生／在籍」は，69.67％（232 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，9.31％（31 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，21.02％（70 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意差が認められた（$\chi^2(2, N=564)=66.88, p<.01$）。標準化残差を求めたところ，「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意

に高かった（p<.01）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（p<.01）。「1 年生／変更」において回答数は，期待よりも有意に低かった（p<.05）。「2 ～ 4 年生／変更」において回答数は，期待よりも有意に高かった（p<.05）。「1 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に低かった（p<.01）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（p<.01）。

【質問 8】あなたは「体罰」についてどのように考えていますか。

③どちらかというと容認していない

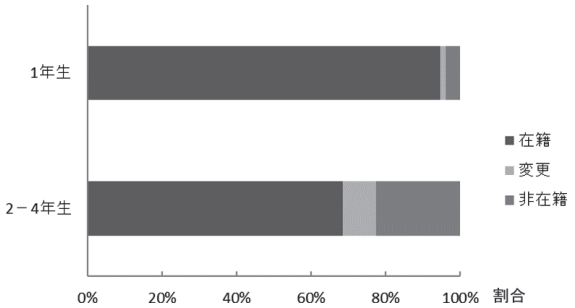

図 73　質問 8－③

クロス集計の結果，1 年生は 335 名，2 ～ 4 年生は 582 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，94.63％（317 名），「1 年生／変更」は，1.49％（5 名），「1 年生／非在籍」は，3.88％（13 名），「2 ～ 4 年生／在籍」は，68.38％（398 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，8.93％（52 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，22.68％（132 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意差が認められた（$\chi^2(2, N=917)=85.25, p<.01$）。標準化残差を求めたところ，「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（p<.01）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（p<.01）。「1 年生／変更」において回答数は，期待よりも有意に低かった（p<.05）。「2 ～ 4 年生／変更」において回答数は，期待よりも有意に高かった（p<.05）。「1 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に低かった（p<.01）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（p<.01）。

【質問 8】あなたは「体罰」についてどのように考えていますか。

④容認していない

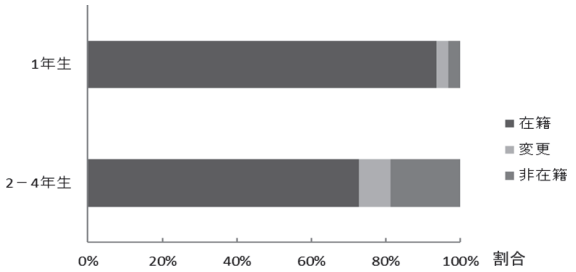

図 74　質問 8－④

クロス集計の結果，1 年生は 757 名，2 ～ 4 年生は 2132 名の回答があった。「1 年生／在籍」は，93.53％（708 名），「1 年生／変更」は，3.3％（25 名），「1 年生／非在籍」は，3.17％（24 名），「2 ～ 4 年生／在籍」は，72.84％（1553 名），「2 ～ 4 年生／変更」は，8.44％（180 名），「2 ～ 4 年生／非在籍」は，18.71％（399 名）の回答数であった。χ^2 検定の結果，有意差が認められた（$\chi^2(2, N=2889)=143.53, p<.01$）。標準化残差を求めたところ，「1 年生／在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（p<.01）。「2 ～ 4 年生／在籍」において回答数は，期待よりも有意に低かった（p<.01）。「1 年生／変更」において回答数は，期待よりも有意に低かった（p<.05）。「2 ～ 4 年生／変更」において回答数は，期待よりも有意に高かった（p<.05）。「1 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に低かった（p<.01）。「2 ～ 4 年生／非在籍」において回答数は期待よりも有意に高かった（p<.01）。

【質問 8】の考察

「容認している」と回答した割合について，クラブに在籍している 1 年生（高校生活）は 96.77％と高く，2 ～ 4 年生（大学生活）は 77.68％と 1 年生よりも低かった。このことは，「変更」，「非在籍」の割合が 1 年生よりも 2 ～ 4 年生のほうが多かったことによるものと考えられる。また 2 ～ 4 年生の「非在籍」の割合が 17.41％と多いことについては，今後さらなる検討を要す課題と考えられる。

体罰は学校の中で部活動や生徒指導の場面で未だに行われており，体罰経験のある学生は，体罰を容認あるいは肯定する傾向が強いと考えられる（兄井ら，2014）[22]。また，高橋・久米（2008）[23] の研究では，体罰を受けた者しかわからない自己変容の可能性を指摘している。

しかしながら，兄井らの報告では，体罰経験のある学生は，体罰を容認あるいは肯定する傾向が強いとあるが，本調査の結果によれば，「容認している」と「ど

ちらかというと容認している」の人数と「どちらかというと容認していない」と「容認していない」の人数を1年生（1531名）と2～4年生（3367名）とで比較したところ，1年生の「容認している」と「どちらかというと容認している」の人数は386名（25.21％），2～4年生の「容認している」と「どちらかというと容認している」の人数は557名（16.54％）であった。また1年生の「どちらかというと容認していない」と「容認していない」の人数は556名（36.31％），2～4年生の「どちらかというと容認していない」と「容認していない」の人数は2714名（80.61％）であった。縦断的データではないため，単純に比較はできないものの，2～4年生の体罰に対する態度が否定的なものであることがわかる。このことは，本学入学以来おこなわれてきた体罰排除教育による成果の一つであると考えられる。

結　論

本研究の目的は，日本体育大学の在学生計5209名（1年生，2～4年生をグループ化）を対象に，①運動部活動の種類（集団競技，個人競技），②運動部活動の所属状況（在籍，変更，非在籍）による違いが体罰の実態と意識に及ぼす影響が認められるのか，また入学後の学生に実施している体罰排除教育への効果が認められるのかを検討することである。

本学の体罰排除に対する取り組みが注目されるなか，本論で示された諸結果は本学にとって有意義なものとなった。

すなわち，被体罰経験，体罰にかかわる目撃・見聞等の経験，体罰の種類等については，高校生活（1年生）と大学生活（2～4年生），集団競技と個人競技との間に明確な違いは認められなかったものの，高校生活と大学生活においては，その回答する傾向が反転している質問項目が多く認められた。高校生活では個人競技よりも集団競技において体罰経験・体罰を見聞きしたことについて，多くの回答があった質問項目でも，大学生活においては逆に個人競技のほうに多い回答の結果となっていた。このことは，高校における個人競技と集団競技の指導方法と大学における個人競技と集団競技の指導法の違いによるものではないかと考えられる。また，高校生よりも大学生のほうが精神的に成熟していると感がられるため，他人に頼るよりも自身で問題を解決しようとする傾向が強いことも考えられる。

また，運動部活動の所属状況について集計・分析をおこなったところ，運動部活動に在籍している学生の体罰経験が多いことが明らかとなった。しかしながら，本学への入学後に，本学が取り組んでいる体罰排除教育が有意な効果を果たしていることが明らかになった。このことから，本学学生が体罰を容認しない傾向は，スポーツの形態を問わず本学のなかに定着していると結論づけることができる。

本学の体罰排除教育の成果と考えられることは，「体罰を受けた者は体罰を肯定する傾向があるとする報告」があるが，今回の調査によって，明らかとなったのは，「容認している」という項目に回答した人数は，1年生は1642名中150名（9.14％），それに対して2～4年生は3567名中174名（4.88％）であった。今回の結果から，先の報告とは，軌を一にするとは言えず，本学が進めている体罰排除教育の成果であると考えられる。

参考文献

1) 藤田主一・宇部弘子・福場久美子・鈴木悠介・本間悠也・小川拓郎・深見将志・藤本太陽・齋藤雅英・谷釜了正　体罰・暴力における体育専攻学生の意識と実態．日本体育大学紀要，44(1)，21–32，2014.
2) 藤田主一・宇部弘子・福場久美子・市川優一郎・鈴木悠介・本間悠也・小川拓郎・深見将志・藤本太陽・谷釜了正　日本体育大学における体罰排除教育の効果．日本体育大学紀要，45(1)，75–92，2015.
3) 谷釜了正・福場久美子・市川優一郎・小川拓郎・鈴木悠介・宇部弘子・軽部幸浩・藤田主一　日本体育大学ける体罰排除教育の取り組み　―縦断的な視点に基づいて―．日本体育大学紀要，45(2)，141–150，2016.
4) 谷釜了正・福場久美子・宇部弘子・鈴木悠介・深見将志・市川優一郎・軽部幸浩・藤田主一　日本体育大学における体罰経験の実態と変容　―学年による比較分析―．日本体育大学紀要，46(1)，77–90，2016.
5) 藤田主一・市川優一郎・福場久美子　学校現場における保健体育教員の体罰に関する態度の研究．応用心理学研究，41(3)，290–298，2016.
6) 文部科学省：運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議　運動部活動の在り方に関する調査研究報告書　～一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して～．平成25年5月27日．http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/__icsFiles/afieldfile/2013/05/27/1335529_1.pdf（2016年10月29日）．
7) 青木邦男　高校運動部員の部活継続と退部に影響する要因．体育学研究，34(1)，89–100，1988.
8) 安田貢・遠藤俊郎・下川浩一・布施洋・袴田敦士・伊藤潤二　大学学生の運動部活動に関する調査　―高校時代のストレス，サポート．自己効力感に注目して―．教育実践学研究：山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要，10，118–128，2008.
9) 谷釜了正・福場久美子・宇部弘子・鈴木悠介・深見将志・市川優一郎・軽部幸浩・藤田主一　日本体育大学における体罰排除教育の効果　―卒業年次生の分析―．日本体育大学紀要，46(1)，91–104，2016.
10) 公益財団法人　日本体育協会　ドーピング防止：ドーピング違反になったら？．http://www.japan-

sports.or.jp/medicine/doping/tabid/541/Default.aspx（2016 年 10 月 29 日）.
11) 松井幸太　高校運動部活動における生徒のオーバーコミットメントと参加動機に対する自己決定性　―性別・学年・競技水準・競技種目からの検討―．聖泉論叢，23，53–64，2015.
12) 長谷川誠　学校運動部活動における「体罰」問題に関する研究．神戸松蔭女子学院大学研究紀要人間科学部篇，No.5，21–34，2016.
13) 阿江美恵子　スポーツ指導者の暴力的行為について．東京女子体育大学紀要，25，9–16，1990.
14) 福島健介　小学校教員を志望する学生の体罰およびいじめに関わる意識調査とその考察　―「生徒指導・進路指導論」の授業における意識変容の検討を含めて―．帝京大学教育学部紀要，1，23–31，2013.
15) 今村修・大塚章代　高校の運動部活動における指導者の暴力的行為に関する研究．日本体育学会大会号，47，570，1996.
16) 冨江英俊　中学校・高等学校の運動部活動における体罰．埼玉学園大学紀要（人間学部篇），8，221–227，2008.
17) 文部科学省　体罰根絶に向けた取組の徹底について（通知）．平成 25 年 8 月 9 日．http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1338620.htm（2016 年 10 月 9 日）
18) 松岡律　教職課程学生の体験にみる体罰否認論の再生産プロセス　―ディベートとインタビューの分析―．人権 21 調査と研究，226，31–37，2013.
19) 楠本恭久・立石泰久・三村覚・岩本陽子　体育専攻学生の体罰意識に関する基礎研究　―被体罰経験の調査から―．日本体育大学紀要，28(1)，7–15，1998.
20) 阿江美恵子　暴力を用いたスポーツ指導の与える影響　―学生への追跡調査より―．東京女子体育大学紀要，26，10–161，1991.
21) 藤田勉・蛯原正貴　動機づけ雰囲気に基づく高校の運動部活動で体罰をする指導者の行動特性：大学生を対象とした回顧的アプローチ，鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要，23，61–66，2014.
22) 兄井彰・永里健・竹内奏太・長嶺健・須崎康臣　将来教員を志望する大学生の体罰に関する意識調査．福岡教育大学紀要，63(5)，95–101，2014.
23) 高橋豪仁・久米田恵　学校運動部活動における体罰に関する調査研究．教育実践総合センター研究紀要，17，161–170，2008.

〈連絡先〉
著者名：谷釜了正
住　所：東京都世田谷区深沢 7-1-1
所　属：スポーツ史研究室
E-mail アドレス：tanigama@nittai.ac.jp